

県営は場整備事業大田切地区（昭和46年度分）

埋蔵文化財緊急発掘調査

# 羽場下・舟山

—緊急発掘調査報告—

1972

駒ヶ根市教育委員会

# 羽場下遺跡、舟山遺跡緊急発掘調査報告

県営は場整備事業大田切地区（昭和46年度分）

1972

長野県駒ヶ根市教育委員会

羽 場 下 遺 跡

## 序

赤穂地区の農業構造改善事業としての土地改良工事が進むにつれて、46年度は、舟山地籍、羽場下地籍も、施工地区に含まれることになり、7月から8月にかけて緊急発掘調査を実施しました。

舟山は45年度に国、県の補助を得て発掘したことは報告書（46年3月30日発行）のとおりですが事業費や作物の関係などで残っていた部分、すなわち舟山地籍の南側斜面地籍の調査を進め、45年に発掘された小堅穴が集落のような形で群っている稀らしい遺構であるとの確認を得ました。

羽場下は赤穂地区の上田の在る地籍で、ここからは縄文前期の出土品や遺構が認められ、上神沢川と如来寺川に挟まれて後方（西側）には大城林などの密林がこもっていた地形が早い時代から開けていたことをうなづかせました。

発掘調査団は、舟山は引続いて林茂樹先生が団長として、羽場下は45年度に藤助畠春日等を担当していただいた友野良一先生を団長として、これに多忙な中をさいて参加下さった調査員の先生方、引続く発掘作業に快く出動して下さった地元の方々、発掘作業の都合上施工の工程を加減して下さった南信土地改良事務所の方々等、多くの方々の厚意が集められて、計画どおりの発掘調査が終了できましたことを感謝し、これら関係の方々を讃賞する次第です。

特に舟山遺跡については駒ヶ根市としては、最古の遺跡があるという前々からの見込みどおりに、これだけ古い時代の小堅穴が群っている遺跡は日本の発掘史上稀らしいということで、長野県考古学会会長、藤森栄一先生や江坂輝彌、八幡一郎先生など斯界の権威者多数が指導に来市され「何とか現状保存を図ってほしい」という御申入れを受けましたが、土地改の方は46年度事業として完工しなければならぬという事情、一方では宅地としての開発が国道沿いに迫っているという事情等で、現状保存に必要な相当面積の地籍を入手することは、財政的に困難でしたので、学究の方々は、文化財行政の貧困を慨嘆されたと思いますが、記録保存の止むなきに至りましたことを、身の縮む思いで付言します。

御指導いただきました先生方以下関係して下さった方々に重ねて厚くお礼申上げますとともに、駒ヶ根市最古の舟山遺跡の最後を伝える事項も含むこの報告書が、学界及び同好の方々へよき資料として役立つことを念願する次第です。

1972. 2. 21

駒ヶ根市教育委員会

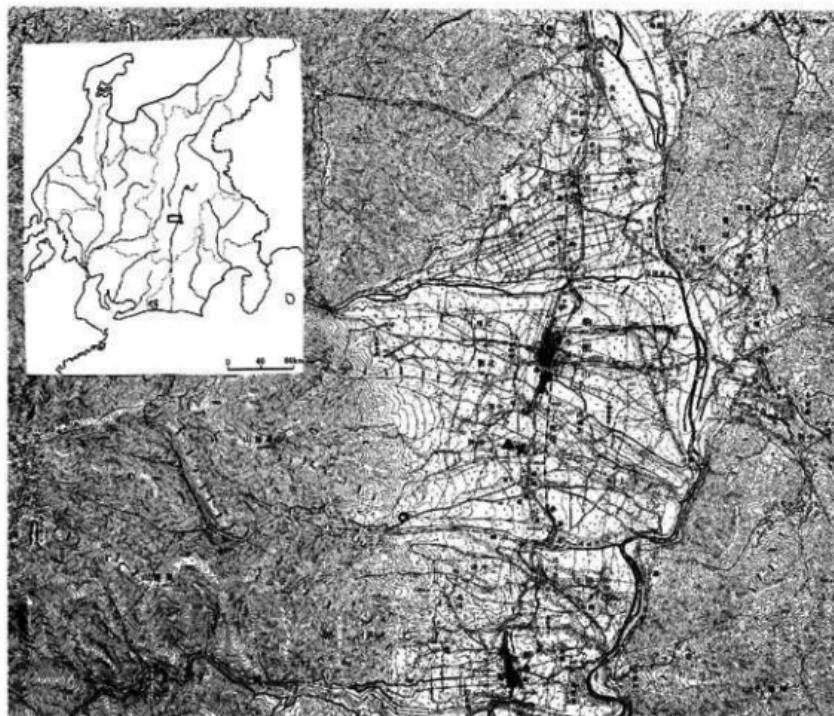
教育長 北澤照司

謹 記

## まえがき 羽場下・舟山遺跡の環境

### 第1節 位 置

羽場下遺跡は、長野県駒ヶ根市大字赤穂 8571—2 に所在する。舟山遺跡はその 200m ほど東方にあって、飯田線伊那福岡駅より北西 1.4km の地点にある。遺跡の北は、中央アルプス木曾駒ヶ岳に源を発す上神沢川と、同じ駒ヶ岳に源を発する如来寺川とに挟まれた舌状台地上にある。本遺跡をとりまく交通路としては、飯島町田切より北進して来た戦国時代に開かれたという伊那街道以前の古道が辻沢部落を通り作左衛門分の東端段丘の下を通り、羽場下部落の中心を抜け大城林遺跡の北から上龍本線に合流し、更に北進し南方、大手、富士山通り宮田村大田切に達している道は、或いは東山道ではないかと言う説もでている古道である。遺跡の南を通る道路は、国道 153 号線如米寺より舟山遺跡の南を登り羽場下遺跡の南を通り、羽場下部落にて辻沢を通過して来た古道に交叉し、更にこの道は射殿場遺跡の北を登り湯原、横前に出、春日街道に通じている。言わば駒ヶ根市を東西に結ぶ主要な道路に面している。また、遺跡の北、上神沢川の北岸には、上赤須より登ってきた道が古墳時代末期丸塚古墳の北を通り、古い地名と思われる市場割



第1図 遺跡の位置（10万分の1）△印は羽場下、×印は舟山。

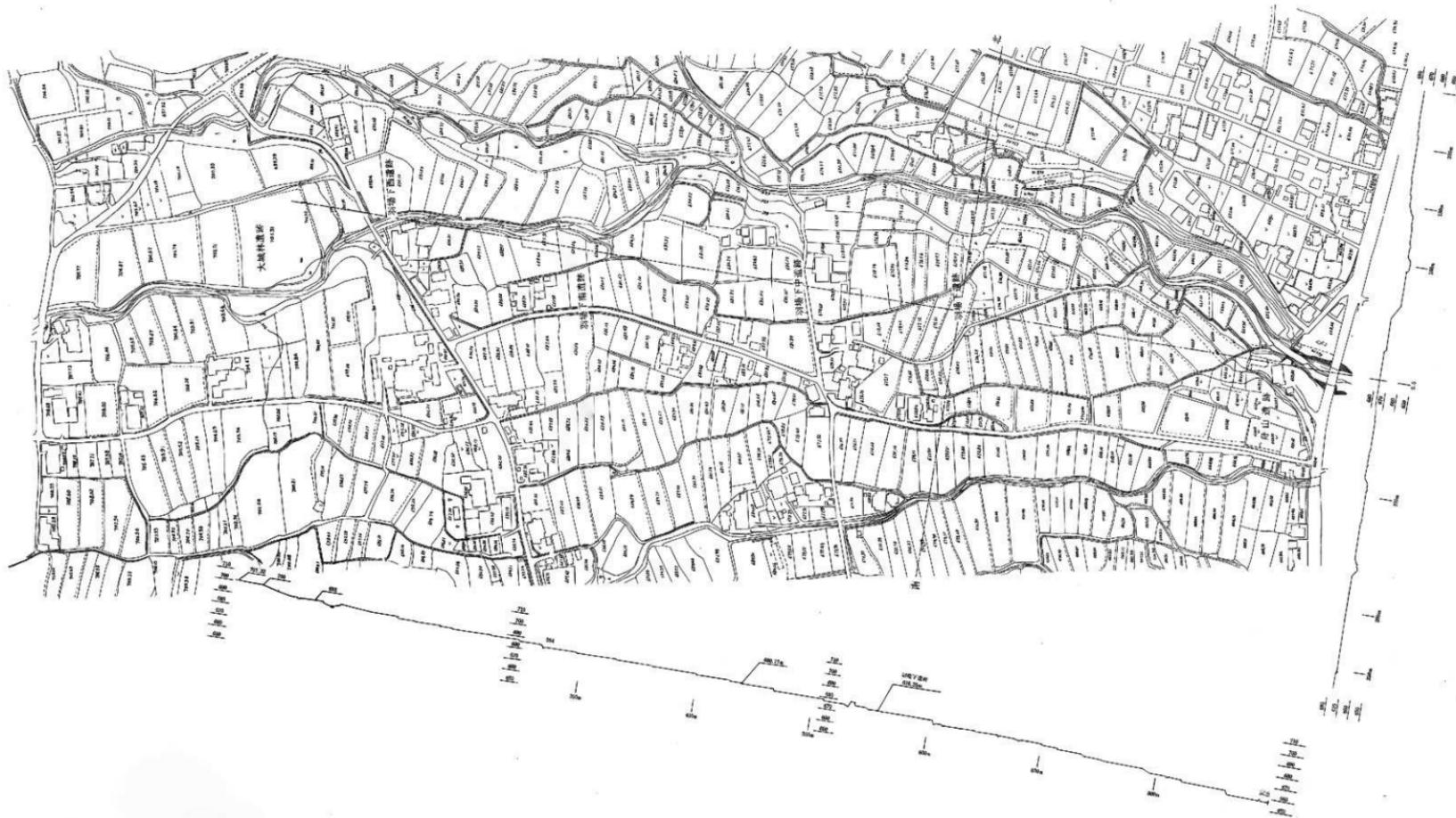
小町屋部落にて一級国道 153 号線、古くは伊那街道に交叉し、平安初期に開山された信濃天台五山の一つである光前寺道があり、いざれも古い歴史的な道路にとり囲まれた位置にある遺跡である。今回大は場整備工事によって、これら古道は残念ながら姿を消すことになるのである。

遺跡の面積は 10,000m<sup>2</sup>

## 第2節 地形、地質

赤石山脈、木曾山脈、伊那山脈とともに南北に走り、木曾山脈と伊那山脈との間を諏訪湖を水源とする天竜川が、これら山地から流れ出する多くの支流を合せ南下している。天竜川の右岸には複合扇状地、河岸段丘を形成する砂礫層が、火山灰土の層をのせ伊那盆地が広がっている。そのうち伊那市付近が東西の幅が広く、宮田の北、伊那市西春近表木部落辺が狭く東西の幅 2.5km、更に駒ヶ根市付近にいたると東西の幅が 8km に広がる。駒ヶ根市より南下すると天竜川の段丘は更に複雑化しその比高も増してくる。またその大小支流河川もそれにつれて浸蝕も多くなる傾向を示している。こうした伊那盆地は、平坦で開けた地域あり、また、東西の山脈が狭まつた箇所もある幾つかの複雑な段丘地形によって形成されている。本遺跡の所在する付近の地形をやや詳細に述べてみると、木曾山脈より流れ出る天竜川水系一級河川大田切川は、市の北の境界をなしている河川で、木曾山脈の主峯 2956.3m に源を発する木曾山脈最大の河川で、その最大洪水量は 764 トン、河川の幅は 500m、段丘比高 30m の荒河川である。この大田切川扇状地は、北に接している宮田村及び伊那市の南部諏訪形、赤木、表木までと、駒ヶ根市赤穂地区の上穂沢川までの面積 53.24 平方キロメートルの広範囲の扇状地を形成している。また、南駒ヶ岳 2,842m に源を発する中田切川は、隣村飯島町と境をなしている最大洪水量 300 トンの河川で、その扇状地は飯島町田切地区全般に及んでいる。駒ヶ根市赤穂地区においては、大田切川扇状地南端上穂沢川で接する複合扇状地を形成し、その面積は 15 平方キロメートルの広範囲である。そのほか大田切川の南に古田切川がある。この古田切川は、大田切川の北を流れる宮田側の小田切川と、まったく同様、大田切川の開析が始まった時期と同じうする河川であるが、大田切川の開析が大きかったために、早い時期に河床が上がってその機能は失なわれたが、その付近の小さな谷川が流れ込み現在に至っている河川である。大田切川の河岸段丘付近には遺跡は稀であるが、古田切川、小田切川の河岸段丘には数多くの遺跡が分布している。大田切川と上穂沢川の中間にネズミ川が流れている。このネズミ川は、空木岳 2,864m の前山、池山標高 1,733m に源を発する小規模河川であるが、その洪水量は 76 トンに達し、近年市の中心部を流れる河川であるところから一級河川に認定され、河川改修が行なわれている。このネズミ川の両岸にも多くの遺跡が分布している。また、上穂沢川は、簗笛山 1,760m 池山に源を発し、深沢川、一の沢川は大城林遺跡の北辺で合流し、赤羽川は、羽場下遺跡の北で合流する。上穂沢川はこのあたりより、次第に深い谷を形成する。舟山遺跡北側付近では、その比高 14m の V 字谷となり現在も開析が進んでいる。駒ヶ根市の大方の遺跡は上穂沢川の両岸に集中している傾向を示している。本遺跡の南を流れている如来寺川は、簗笛山の東南谷に源を発し南斜面、湯原、羽場下部落を流れ如来寺の東方で上穂沢川に合流する。その洪水量は 30 トン規模河川にして多い水量である。羽場下部落の主要水出はこの如来寺川の氾濫原である。現在は場整備工事と併行して河川改修が伊那建設事務所の手で進められている。中田切川と如来寺川との中間を辻沢川が流れている。辻沢川は、大田切川と古田切川の関係の如く、古くは中田切川の支流河川であったのか、中田切川の開析が進むにつれ河床が上昇して水の流れない河川となった。その後流域内の雨水が流れ込んで小さな川となり、洪水には見舞われたことのない河川となった。この辻沢川両岸には縄文早期の遺跡が特に多い。そのほか中期、後期、土師の遺跡が数多く発見されている。駒ヶ根市赤穂地区では上穂沢川に次ぐ主要な箇所の一つである。

以上駒ヶ根市の遺跡分布は、第一に河川に沿って発達したと言っても過言ではない。第二に南北に走る二条の段丘に沿って遺跡が多いこと。第三に駒ヶ根市赤穂を取り囲む天竜川、大田切



川、中田切川の如き大河川の段丘上には遺跡は少いこと。最近山麓付近の鉛錠変換地形、特に谷の入口付近には必ずと言ってよいくらい遺跡が発見される。昭和45年度は場整備事業の緊急発掘中山原では、駒ヶ根市でも数少ない櫛文早期、弥生式前期の優秀な遺跡が発見せられ注目を浴びたことは周知のとおりである。また、昭和46年7月養命酒駒ヶ根工場敷地内に発見された、弥生式の前期に属する水神平式が、この高所に分布しているという事実は今後話題を投げ掛けることになる。そのほか、土師、櫛文早期の遺構等が多く発見せられたことは、今日までの山麓遺跡に対する概念を改めなければならない重要な要素となった。今後山麓も高座道に付随するサービスエリア、インターチェンジ等で破壊される危険性が多い。また、春日街道より西方は現在ネズミ川、深沢川、一の沢川、赤羽川等30~70トン級の小河川によって今日過剰堆積が行なわれている状態である。

木曾山脈は地質構造上では、内帯に属し、主として花崗岩と、古成層の変成された、黒雲母粘板岩で代表され弱変成岩、黒雲母片岩、縞状片麻岩からなっている。花崗岩は木曾駒ヶ岳の南部に露出しこの中には、ホルンヘルス、黒雲母片麻岩がとり込まれている岩質構造である。本遺跡の所在する駒ヶ根市赤穂地区は、木曾山脈の中でも南部に属しているので、その地質構造は、領家花崗岩のみで、岩石としては斑状花崗閃綠岩、縞状片麻岩、変光綠岩、中粒黑雲母花崗岩、粗粒黑雲母花崗岩等によってこの地域の基盤の層層は形成され、その上に小坂田ローム暗色帶及び第4浮石帶の一部が大城林の北辺の段丘に僅かではあるが認められるが、そのほかこの付近には中期ロームは発見されない。羽場地区は場整備工事中大城林遺跡の北面段丘の一部を欠き上総沢川を迂回させた河床に、熱変成作用によってできた変質花崗岩の大転石が現われ、上部に砂礫層が堆積しその上は新規ロームによって覆われているが、この段丘東端上総本線にそって東側より22m、西に上層に黒土層30cm、黒褐色土層20cm、軟質ローム40cm、赤褐色で乾いたほくほくのローム層1.4m、その下層に赤褐色硬質ローム層1m、この層位から下は砂礫に混じった中期ロームと思われる黄色の30~50cmの層が帶状に露出している。この異状的な堆積層は、上総沢川を隔てた上総沢遺跡及び上の原~藤助畑遺跡まで連していることが明らかになったが、一般的な平坦地は新規ローム層の堆積であって、前述の如き中期ロームは発見できない現状である。本調査の行なわれた、羽場下遺跡の地層は、黒色土層30~50cm、黒褐色15~20cm、その下部は軟質ローム40~50cm、つづいて硬質ローム40~50cm、この下は黄褐色ローム混りの砂礫層が堆積している。羽場下遺跡の南は地形圖で明らかの如く、大城林の段丘下より一般国道153号線間は一段低い湿地帯である。この一带が羽場下部落の主要な農作地であることになる。如来寺川はこの湿地帯のはば中央を流れる幅5.7mの小河川であるがかつては氾濫原を形成した川である。

舟山遺跡はこの如来寺川と、上総沢川との間に形成された孤立状地形で、南北60m、東西200mの船体形を呈し、上総沢川との比高20mを測る。その地層は羽場下遺跡とはほぼ同じ構成であり、洪積世最末期に形成された地形である。

### 第3節 歴史的環境

本遺跡の所在する駒ヶ根市赤穂地区は、古地名で知られる赤須、上穂が合併して赤穂村と命名された山地ある市である。古代美女ヶ森大食神社に織る日本武尊の伝説と小鏡治古墳群、原垣外古墳群、須恵器を多量に出土する御射山遺跡も大食神社付近にある。また平安時代初期の開山である信濃天台五山の一つに數えられる名勝光前寺等歴史的に有名なところが多い。

前述地形の項で述べた如く、大きくは、大田切川扇状地と中田切川扇状地は駒ヶ根市の中央やや南寄の上総沢川を境に、南と北が高い地形上更にその間に幾つかの小河川が東流する。駒ヶ根市赤穂地区に分布する遺跡の80%は、これら河川に沿って分布している。現在駒ヶ根市赤穂地区に発見されている遺物発見地点は230余箇所の多さに連している。現在公にされている遺跡は櫛文早期からでその分布は上総沢川より南の地区で主に中田切川扇状地内に多い傾向を示してい

る。また、国道上より西側地区に集中している。舟山遺跡、辻沢遺跡、国道東側辻沢川下流辻沢遺跡、大明神遺跡、養命酒駒ヶ根工場遺跡等である。縄文前期の遺跡は少なく本遺跡が代表的なものである。縄文中期遺跡は駒ヶ根地区全般に亘って分布し、その数96を数え、大城林はじめ數多い大集落址が存在する。縄文後期遺跡は、中割原、原垣外、舟山、十二天、晚期遺跡は辻



1. 丸塚
2. 舟山
3. 羽場下
4. 羽場下中
5. 羽場下南
6. 上穂沢東
7. 藤助塚
8. 上穂沢
9. 上野原
10. 大城林
11. 八幡原
12. 四分一
13. 四分一西
14. 四分一北
15. 春日
16. 春日北
17. 番田
18. 唐松新田
19. 中割原北
20. 中割原
21. 横井下
22. 横前北
23. 横前新田
24. 横前新田南
25. 射殿場
26. 小町谷
27. 作左=門分分
28. 大徳原
29. 大徳原西
30. 大原西新田
31. 駒ヶ根工業四
32. 大原
33. 大原北
34. 十二天
35. 羽場下西
36. 北方
37. 南原

第3図 羽場下遺跡付近の遺跡分布図（1万分の1）

沢、如来寺、女体遺跡等が代表的な遺跡である。弥生式遺跡は舟山、下平北原、辻沢、蟹沢、十二天、宮ノ前、養命酒駒ヶ根遺跡等は波及期における遺跡である。その外後期に属する弥生式遺跡は、福岡、大原、赤須、舟山遺跡等がある。土師器、須恵器を出土する遺跡は赤須地区全般にわたり発見されているが、発掘により調査された遺跡は、養命酒駒ヶ根工場遺跡、羽場下遺跡、辻沢遺跡等である。駒ヶ根市赤穂における古墳分布は、前述の如く早期遺跡が赤穂地区の国道西南地区に限定されたに比し、古墳は国道東美女ヶ森～小殿治にかけての一角と、上穂沢川北岸市場削丸塚古墳のみである。この事実についての問題は今後に譲りたい。

羽場下遺跡を中心とした地区は東山道の通過地点としても有力な候補地である。また平安時代初期に開拓されたと伝えられる、名刹光前寺に通ずる光前寺道も羽場下地籍を通っている。古地名にも、大道上、市場、木戸、垣込、舟山、町張、丸塚、小町屋、市場垣外等古い地名はこの地区的歴史を解する重要なポイントである。以上羽場下・舟山遺跡を取扱む歴史的環境の一部を述べた。

## 凡　　例

1. 今回の調査は昨年度実施された大田切は場整備事業に伴う第1次、2次緊急発掘調査に続くもので、第3次報告書とする。
2. この調査はは場整備事業に伴う緊急発掘で、事業は南信土地改良事務所の委託により、駒ヶ根市教育委員会が実施した。
3. 本調査は46年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述もできる限り簡略し、資料の再検討は後日の機会にゆすることにした。
4. 本報告書の執筆者は次の通りである。担当した項目の末尾に執筆者を明記し、その責任を明らかにした。
  - ・本文執筆者　　友野良一、福沢正陽、吉村　進、北沢雄喜、吉沢文夫
  - ・図版作製者
    - ・遺構及び地形実測図　　吉村　進、山田　年
    - ・土器拓影及び実測図、石器実測図　　吉村　進
  - ・写真撮影
    - ・発掘及び造構　　福沢正陽、吉村　進
    - ・遺物　　吉村進、友野良一
5. 本報告書の編集は主として市博物館があたった。

## 目 次

序 .....	(市 教 育 長)
凡 例 .....	(6)
目 次 .....	(7)
図 版 目 次 .....	(8)
挿 図 目 次 .....	(8)
図 版 I ~ X .....	(9~18)
第Ⅰ章 発掘調査の経過 .....	(前 沢 正 陽)
第1節 発掘調査の経緯 .....	(19)
第2節 調査の組織 .....	(19)
第3節 発掘作業経過 .....	(20)
第Ⅱ章 遺 構 .....	(吉 村 進) (22~26)
第Ⅲ章 遺 物 .....	(吉 村 進)
第1節 土 器 .....	(27~35)
第2節 石 器 .....	(35~38)
第Ⅳ章 ま と め .....	(友 野 良 ...) (39~41)

## 図版目次

図版	(頁)	図版	(頁)
I 遺跡航空写真	9	VII 第4号住居址出土土器および第1~3類	
II 羽場下遺跡全景	10	上器	15
III 遺構 住居址	11	■ 第4類土器	16
IV 遺構 住居址および堅穴	12	■ 第5類土器	17
V 遺構堅穴および遺物出土状態	13	X 石器	18
VI 第2号住居址出土土器	14		

## 挿図目次

	(頁)		(頁)
第1図 羽場下遺跡の位置図	1	第10図 第2号住居址出土土器実測図	28
第2図 羽場下遺跡の地形図	2	第11図 第4号 " "	29
第3図 " 付近の遺跡分布図	4	第12図 第1~3類土器折影	29
第4図 " 遺構全調図	22	第13図 第4類土器	31
第5図 第2, 3号住居址実測図	23	第14図 第5類土器	33
第6図 第4号住居址実測図	24	第15図 石器(石鎚, 挖器)	36
第7図 第5号 "	25	第16図 " (挖器, 石錐, 石匙)	37
第8図 第1号 "	26	第17図 " (打製石斧, 円形特殊石器)	38
第9図 第3号堅穴実測図	26		



図版 I 遺跡付近航空写真  
(2は舟山、3は羽場下遺跡 拝図第3図参照)

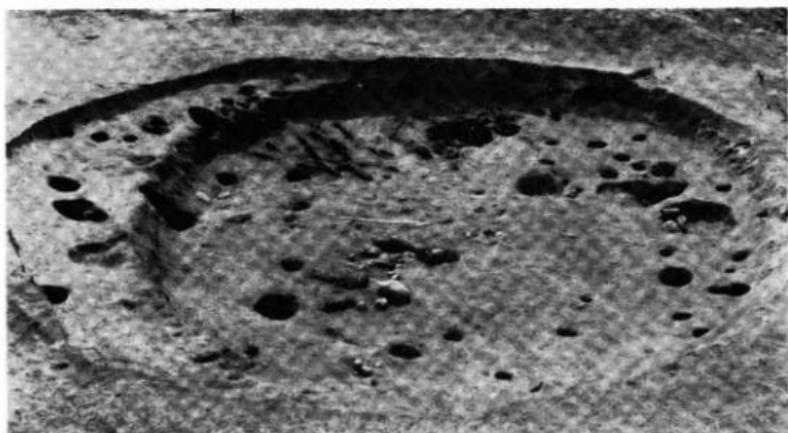


1. 上総沢遺跡より羽場下遺跡を望む

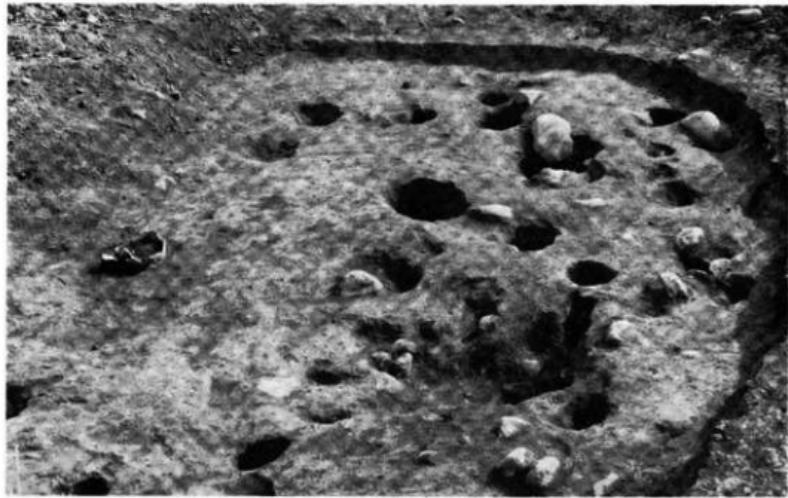


2. 上総沢川北岸より遺跡台地を望む

図版II 遺 跡 全 景



1. 第2, 3号住居址（東側より）



2. 第4号住居址（北より）

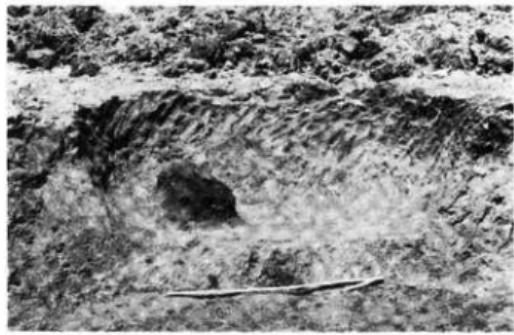
図版III 遺構住居址



1. 第5号住居址（東側より）

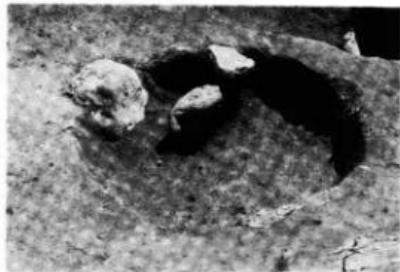


2. 第1号住居址（西側より）

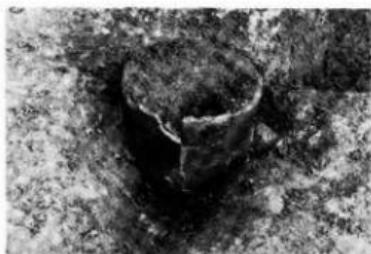


3. 第3号竪穴

図版IV 住居址および竪穴



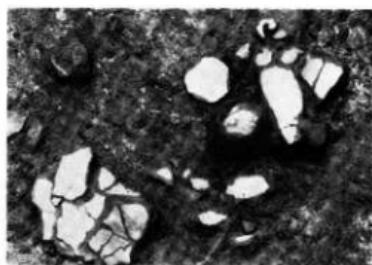
1. 第2号窓穴



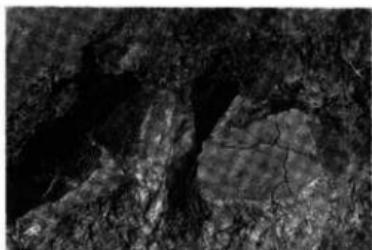
3. 第2号住居址土器出土状態



5. 第4号住居址土器出土状態



2. 第2号住居址土器出土状態



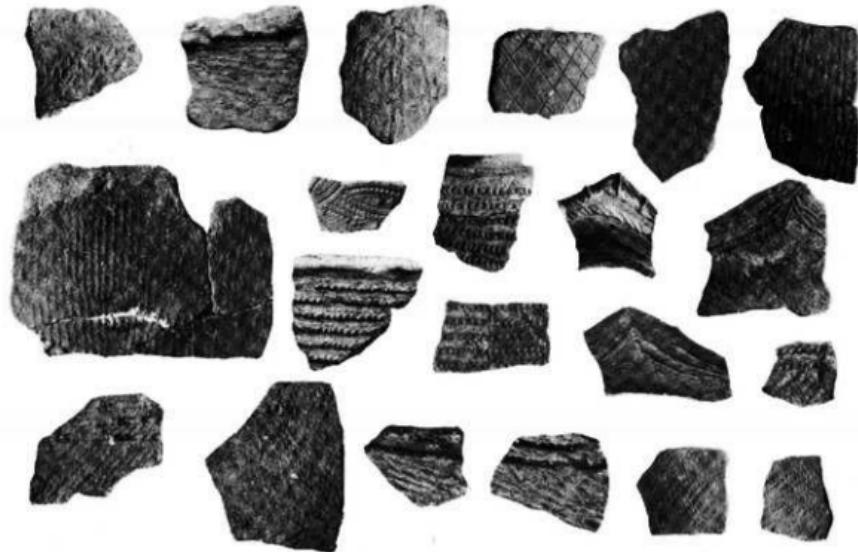
4. 第3号住居址土器出土状態



圖版 VI 第 2 号住居址出土土器

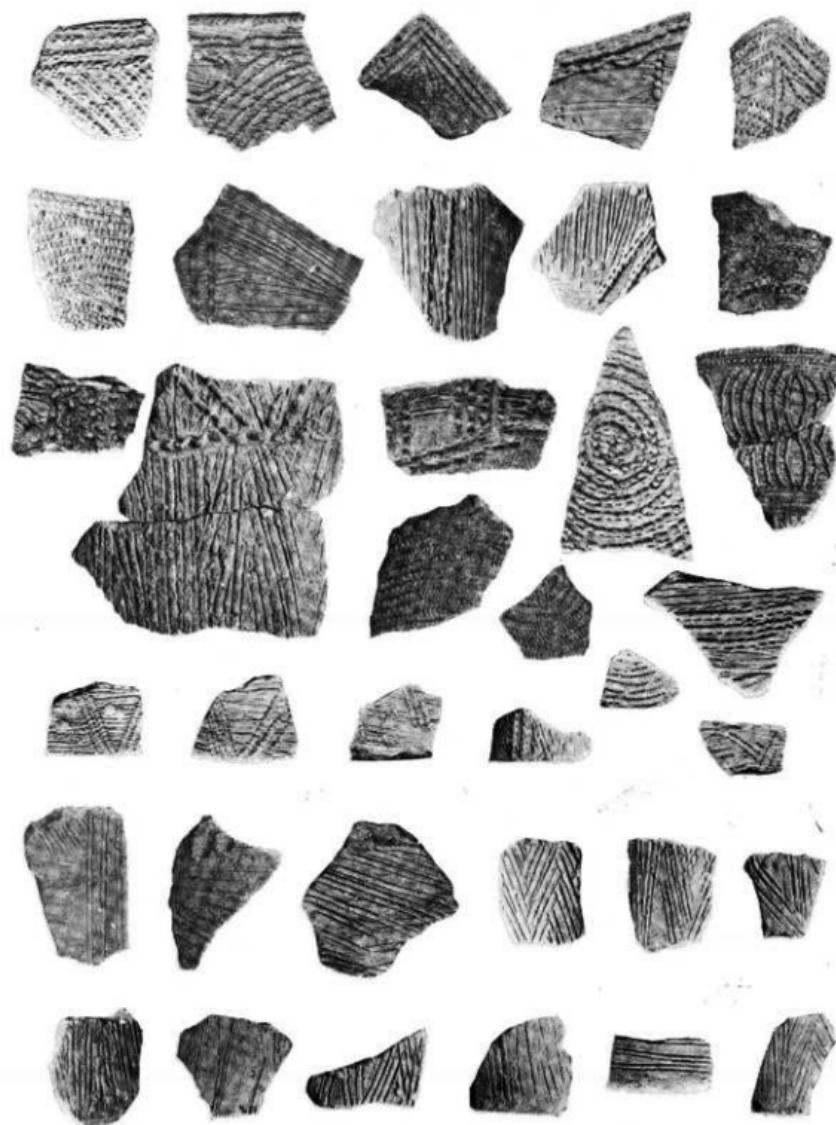


1. 第4号住居址出土土器

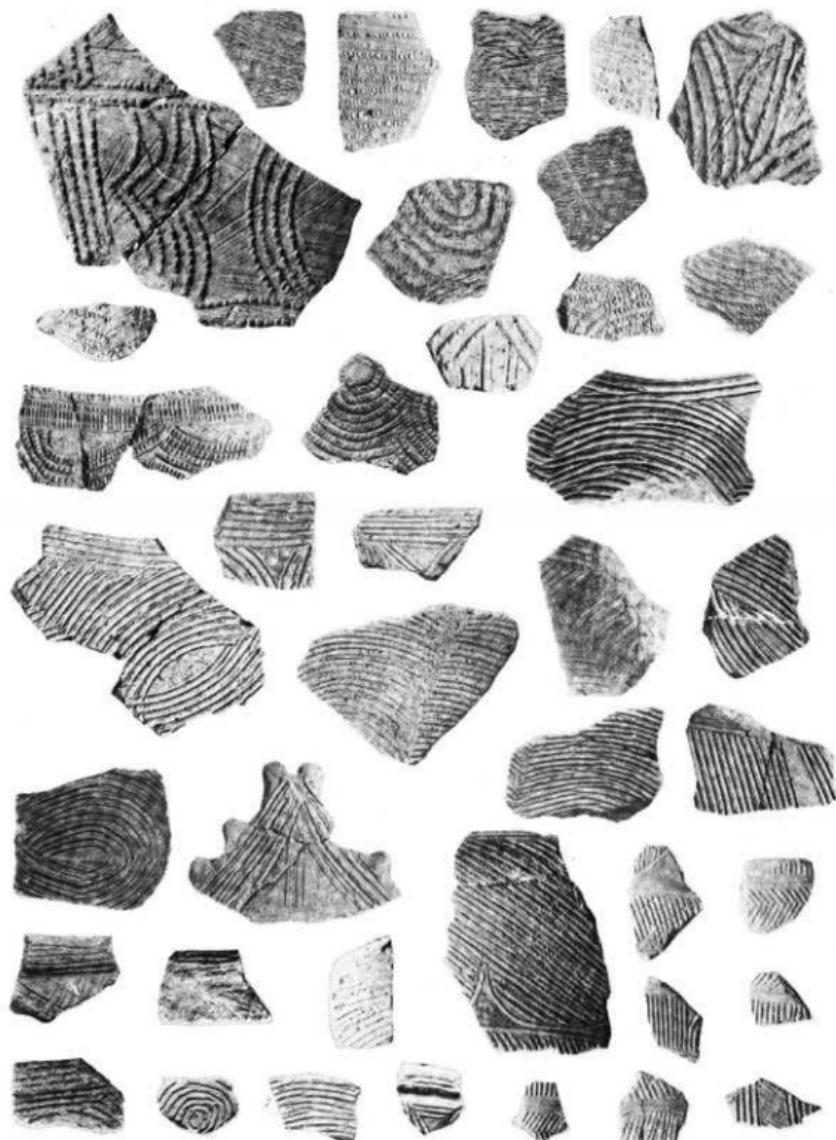


2. 第1~3類土器

図版VII 第4号住居址出土土器及び第1~3類土器



図版四 第4類土器



圖版K 第5類土器



圖版X 石 器

## 第Ⅰ章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査の経緯

昨年度実施された県営は場整備事業大田切地区埋蔵文化財緊急発掘調査について、本年度も、第Ⅲ工区内の羽場下遺跡の調査を委託された場合は、受託されるよう県教育委員会より、市教育委員会への連絡があり、迫って南信土地改良事務所から、緊急発掘調査について、発掘調査計画書とともに委託したい旨、市教育委員会へ依頼を受けたので、市当局、市教育委員会と協議の結果、市立博物館を中心、県営は場整備大田切地区（第Ⅲ工区）埋蔵文化財調査会を結成し、この中に調査団を含め、具体的打ち合わせを実施し、7月22日南信土地改良事務所長と市長との間に、「埋蔵文化財保有地発掘調査委託契約」を締結、また市長と調査会との間で再委託契約をし、7月23日第Ⅲ工区関係者と調査会関係者（小池館長、福沢正陽、吉村進）による現地調査と発掘現場での具体的な打ち合わせを行なう。一方県教育委員会に調査の着手について連絡し、指示を得たので、友野良一氏を団長とする調査団を編成し、7月25日から発掘調査を開始した。

### 第2節 調査の組織

#### ・県営は場整備事業大田切地区（第Ⅲ工区）埋蔵文化財調査会

会長 北沢 照司（市教育長）  
理事 木下 義男（市文化財調査委員会会長）  
" 下村 忠比古（" " 調査委員）  
" 小池 金義（市博物館長）  
監事 池上 重雄（駒ヶ根市文化財保存会長）  
" 気賀沢善右衛門（駒ヶ根郷土研究会長）  
幹事 福沢 正陽（市博物館学芸員補）  
" 武藏 法子（市博物館）  
" 細田 繁子（" ）

#### ・調査団

団長 友野 良一（長野県考古学会会員）  
調査員 吉村 進（明治大学学生）  
" 小池 政美（長野県考古学会会員）  
" 田中 審久雄（国学院大学学生）  
" 山田 午（長野県考古学会会員）  
特別調査員 木下 平八郎（" " " ）  
調査補助員 北沢 雄喜（" " " ）  
" 吉沢 文夫（" " " ）  
調査補助員 福沢 正陽（市博物館学芸員補）  
丸山 弥生（国学院大学学生）

発掘調査は7月25日から8月3日まで、現場で行なったが調査を実施するに当たって、調査団員、土地改良事務関係者、中太興業、小沢建設、地主の方々、地元協力者等をはじめ、多くの方々のご協力とご配慮によって、ここに初期の目的を果たし調査を終了することができました。関係者の献身的なご協力に心から感謝の意を申し上げる次第です。

### 第3節 発掘作業経過

7月25日（日）曇一時雨 本遺跡を発掘するにあたり、吉村調査員の概略説明が行なわれ、最初に煙の部分へグリッド8カ所を設定し、調査に取りかかる。なお、作業時間は午前8時30分から午後5時30分までと定めた。この個所からは遺構のないことが確認されたので、午後より墓地の北側の発掘に着手する。土師の土器片とかまどらしき遺構を発見し、意気あがむ。一号住居址とする。一方田の部分は11時頃よりブルドーザーで、埋土部分の削土を行なうも、何回もの田直しにより、複雑さを窺み、旧表土の確認に手間どる。なお掘り下げるところ20cmで、諸磯式、また前期末葉土器片と石斧、石鎌等が埋土部分より出土した。状況からしてかなりの遺構破壊がすでにされたものと思われる。

調査員3名、補助員1名、作業員7名、事務局2名

7月26日（月）雨 雨のため現場作業中止

7月27日（火）晴 昨日の雨で地盤が軟弱につき、一昨日発見された1号住居址の掘り下げに午前中全力を注ぐ。かまど南側に前期末葉のピット（底部に諸磯式の土器片出土）を発見する。1号住居址はこの部分が貼床になっていたが、擾乱の為はっきりとは確認できなかつた。午後1号住居址の西側にグリッドを設定し、試掘を始めた。今まで田となっていた下を本格的に調査するという例はほとんど行なわれていないので、いかような方法で行なうべきか苦慮した。田の地場より10cm程の所に住居址らしき落ち込みを確認する。

調査員1名、補助員3名、

作業員9名、事務局2名



墓地北側田の発掘風景

7月28日（水）晴一時曇 昨日発見した落ち込みの調査を行なう。平面プランを捕えるために表土はぎを行なう。プランからみると相当大きな住居址更に複合住居址の可能性もでてくる。中央南北にセクションベルトを入れて掘り下げるところ40~50cmで一部床面を確認する。これを2号住居址とする。地場より20cmの深さで南側に床面を発見し複合住居址とわかる。3号住居址とする。3号住居址床面レベルまで覆土を拂土するも貼床の様相はみられず、3号住居址を2号住居址が切っているものと断定した。

調査員1名、補助員3名、作業員10名、事務局2名

7月29日（木）晴 2号住居址と3号住居址の発掘を併行して行なう。3号住居址は南側壁より北側に広いところで40cm位床面が半月形に残されているだけである。2号住居址よりは、諸磯C式、下島直後形式の土器片が多量に出土する。柱穴と焼土も発見される。中心より東側底土下から埋甕に使用したと思われる前期末葉の土器が出土する。1号住居址の測量も完了する。



第2、3号住居址発掘風景

調査員 2 名、補助員 3 名、作業員 11 名、事務局 2 名

7月30日（金） 晴 2号住居址の完掘に全力を注ぐ。東側壁ぎわに前期末葉の土器がつぶれて出土する。教育長他 2名現地視察。

調査員 2 名、補助員 3 名、作業員 13 名、事務局 2 名

7月31日（土） 晴 2号住居址の北側、下の田に発見された燒土の性格を確認するため、拡張する。一方ブルドーザーでは場整備作業を行なう最中に、2号住居址南側、墓地わきに落ち込みを発見調査を行なう。出土遺物もかわりない。住居址中央よりつまみ状把手を持った土器の出土を見、貴重な資料となる。なお2号住居址の西南10mに半分削土された深い堅穴を発見する。2号住居址西側にグリッドを設定、表土の削土を行なう。大きな落ち込みを発見する。先きの住居址を4号、これを一応5号住居とそれぞれ命名する。中間報告会及び今後の打ち合わせを団長のもとに現場にて行なう。木下平八郎氏来市する。

調査員 5 名、補助員 3 名、作業員 13 名、事務局 2 名

8月1日（日） 晴 4号、5号住居址の調査を行なう。4号住居址は完掘、写真撮影も終了する。5号住居址は完掘できず一部明日に残す。遺物は前期末葉のものである。木下平八郎により2号住居址の、写真撮影を行なう。

調査員 5 名、補助員 3 名、

作業員 11 名、事務局 2 名

8月2日（月） 晴 5号住居址の発掘を完了。全ての遺構の写真撮影、実測を行なう。一部実測を明日に残して発掘をほとんど終了する。

調査員 4 名、補助員 3 名、

作業員 4 名、事務局 2 名

8月3日（火） 残りの実測を終り、器材の点検を行ない羽場下地区の調査を終了する。午前中早稲田大学教授瀧口宏氏現地視察

調査員 3 名、補助員 1 名、作業員 1 名、事務局 2 名



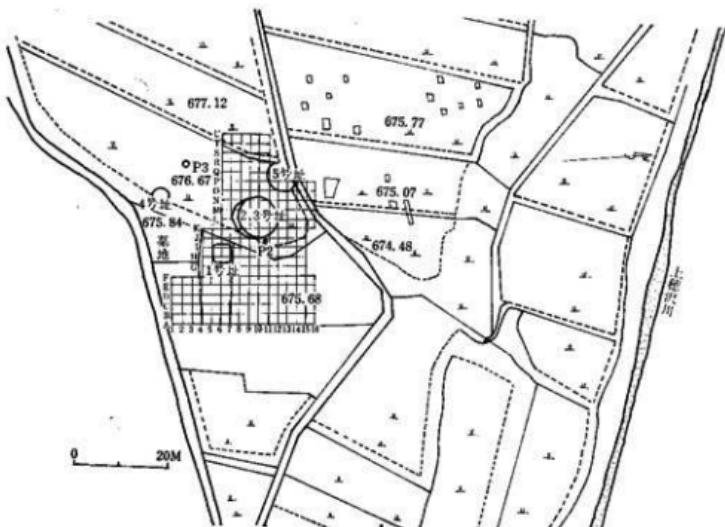
北側田の調査風景



早稲田大学瀧口教授視察

## 第Ⅱ章 遺構

今回の調査はすでに破壊された遺跡の残られた一部、田の埋土部分にわずかの希望をつないで行なわれたわけであるが、予想外の成果を取ることができた。何回もの田直しにより、旧表土がなかなか確認できず、発掘作業は困難を窮めた。また旧地形がわからず、は場整備作業に伴って、遺構が確認されると、後手をまねいてしまったこともあった。今回の調査を契機として、同様な状態の遺跡についても慎重なる調査が望まれる。今回発見された住居址は、5基であるが、開田当時破壊されたことを物語るように田の埋土中に土器片が発見されている。正確な旧遺跡の範囲はつかめないが、遺跡密集地帯である点からも、当時かなりの規模の集落が存在したと考えられる。以下遺構別に記述したい。



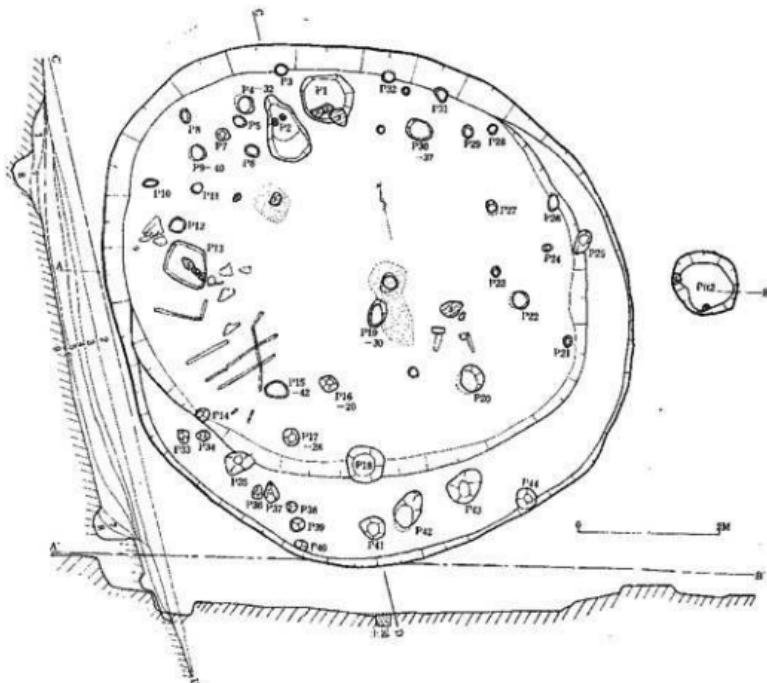
第4図 羽場下遺跡遺構全測図

### 第2号住居址（第5図、図版Ⅲの1）

この住居址は、南北6m、東西約7mの梢円形を呈すものである。3号住居址を南側一部を残して切っている。壁高は北で40cm前後、南で30cm前後を示す。床面はローム層中にあり、タタキが施されて堅く良好である。

住居址覆土の堆積状態は7層に分けることができる。（実測図参照）

- |    |       |                                 |
|----|-------|---------------------------------|
| 2層 | 赤褐色土層 | 種の根による搅乱浸透が及び、赤褐色を呈し田の地場である。    |
| 3層 | 茶褐色土層 | ローム粒を含み、若干炭化物が認められ、堅くなっている。     |
| 4層 | 黒色土層  | 有機質とローム粒の混合で粘質性に富んでいる。          |
| 5層 | 茶褐色土層 | 3層に似ているが、炭化物およびローム粒の混入が多く粘質性強い。 |



第5図 2、3号住居址実測図

- |                  |           |   |
|------------------|-----------|---|
| 居<br>址<br>覆<br>土 | 6層……黄褐色上層 | ロームの大きなブロックを含み、しまりなくバサバサしている。                 |
|                  | 7層……褐色土層  | 6に似ているが、若干黒味を帯び、ロームブロックは小さい。腐乳層と思われ、バサバサしている。 |
|                  | 8層…… "    | 6に似ているが粘質性に富んでいる。                             |
|                  | (ピット内覆土)  |   |

住居址内には30を越えるピットがあるが、主柱穴と思われるものは、P<sub>1</sub>, P<sub>15</sub>, P<sub>20</sub>, P<sub>30</sub>の4つである。北壁に沿って小ピットが認められるがタルキの跡ではないかと思われる。

住居址北壁より2m、西壁より1コ径50~70cm、深さ20cm前後のたらい状のピットがある。貯蔵穴と考えられる。住居址内には、炭化物が多量にみられ、特に南西壁には柱と思われる木炭がみとめられた。火災に会ったものはそれに伴なう焼土がないので不明である。

焼土は二ヵ所認められ、どちらも堆積はうすい。中央部の焼土の下より、口縁部を床面に合わせて切り取った下島直後形式に比定できうる深鉢土器が出土した。中には粒子の細かい炭化物が充満していた。埋甕炉と思われる。東壁ぎわに、深鉢一個体が一括出土した。他の同時期の住居址に比べて規模は大きいものである。

### 第3号住居址（第5図、図版Ⅲの1）

第2号住居址により、大部分を切り取られ、南側に三ヶ月状に床面を残しているだけである。

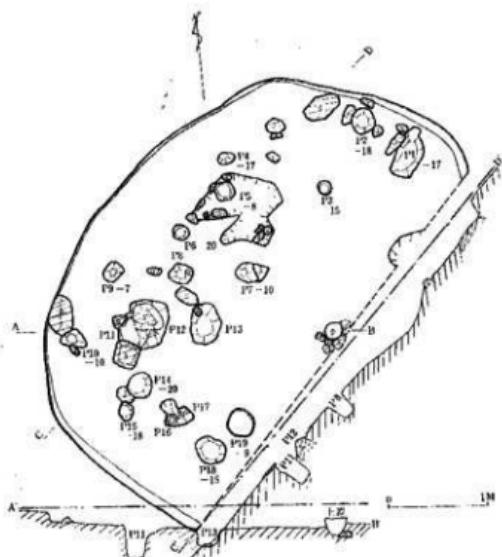
規模は推定 7m。プランはほぼ円形と思われる。ピットはタルキ跡と思われるものを含めて、13コ認められるが、主柱穴と考えられるのは P<sub>1</sub> のみである。また 2 号住居址のピット中浅いものは、本住居址の柱穴とも考えられる。床面より諸礫期の古い時期に比定でき得ると思われる縄文のみの土器がかなりまとまって出土した。

#### 第 4 号住居址（第 6 図、図版Ⅲの 2）

本住居址は 2、3 号住居址より南へ約 20m、農道わきに発見され、東南半部を農道により切られている。規模は長径 4.5m、短径 4m、卵型を呈すと思われる。床面はローム層を切り込んでいるが、疊と砂質ロームからなり、不良である。壁高は南側で 10cm、北側で 20cm を数える。

ピットは多く認められ、柱穴数ははっきりしないが、P<sub>1</sub> と P<sub>2</sub>、P<sub>11</sub> と P<sub>12</sub> などをみると改築の可能性も考えられる。残存中の住居址内よりは、焼土はまったく認められなかった。

住居址中央やや東側より、底部を抜いて、まわりをこぶし大の疊で固めたつまみ状の把手を持った漆鉢（図中の D）が出土した。富士見町の龍畠遺跡より出土した土器に類似している。（北沢 雄喜、吉沢文夫）



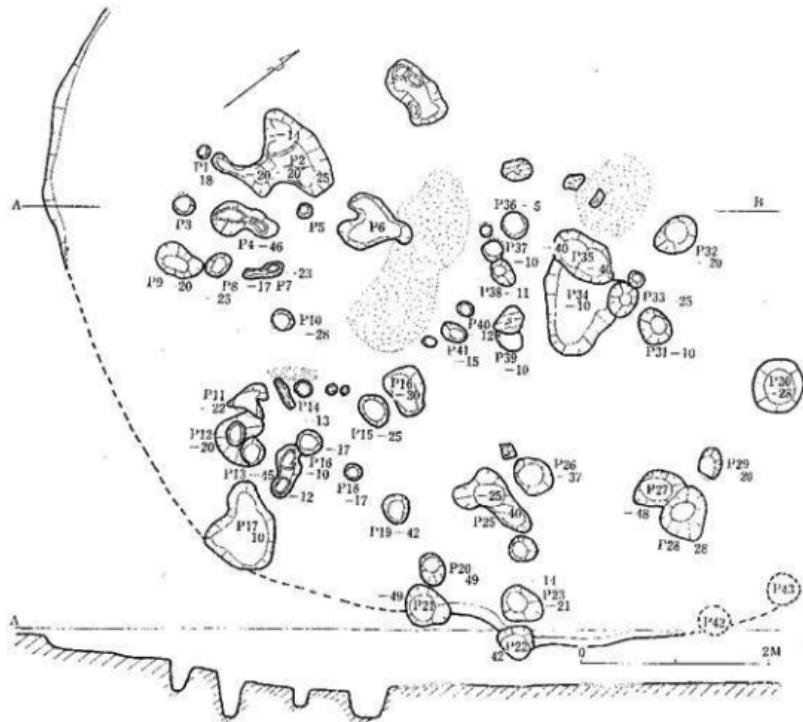
第 6 図 4 号住居址実測図

#### 第 5 号住居址（第 7 図、図版IVの 1）

本住居址は 2 号住居址西側 4m に位置している。

搅乱が加えられており、プランはあまりはっきりしないが梢円形、規模は北側削土のため、推定であるが、東西約 9m、南北 7m である。床面は舟底型を呈し、中心部に若干のタタキが認められるのみである。

住居址のピットの配列は複雑で、三個程の竪穴住居址の複合とも思われる。1 つのグループは、



第7図 5号住居址実測図

西側に認められる焼土を取り囲む一群、次はその東側にみられる焼土付近、即ち P<sub>16</sub>, P<sub>18</sub>, P<sub>20</sub>, P<sub>17</sub>, P<sub>19</sub>, P<sub>21</sub>などの一群、更に住居址南側にみられる所の P<sub>14</sub>, P<sub>11</sub>, P<sub>13</sub>, P<sub>15</sub>, P<sub>23</sub>, P<sub>19</sub>, P<sub>15</sub>などの一群である。この3グループの間にははっきりしたレベル差が認められない。住居址の複合か拡張か不明であるが報告にとどめておく。出土遺物は諸種C式、下島直後形式が出土している。いずれの焼土もうすく5cm前後である。

#### 第1号住居址（第8図、図版IVの2）

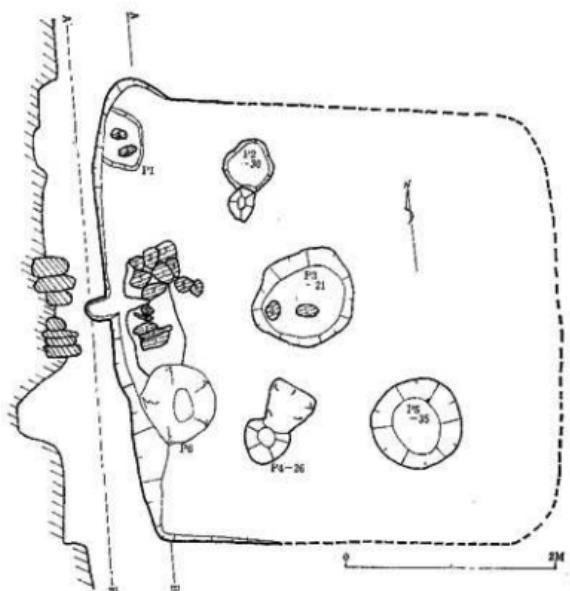
本住居址は今回最初に発見されたもので土師後半のものである。出土遺物はかまど内より破片が数片出土しただけである。

表土から浅く、15cm程で床面に達し、北側はイモ穴、東側は耕作により破壊されている。

上層構造は四本柱と思われる。住居址中央、カマド正面に約90cmの円形の浅いビットがあるが性格は不明である。

かまどは石組で、付近の花崗岩が用いられ、若干ロームを貼付している。煙道がわずか認められる。焼土の堆積はうすく5cm内外である。

なおかまど南 P<sub>4</sub>の周囲は若干貼り床が認められ、底部より縄文前期末葉の土器片が出土した。その竪穴は約70×40cmの椭円を呈している。



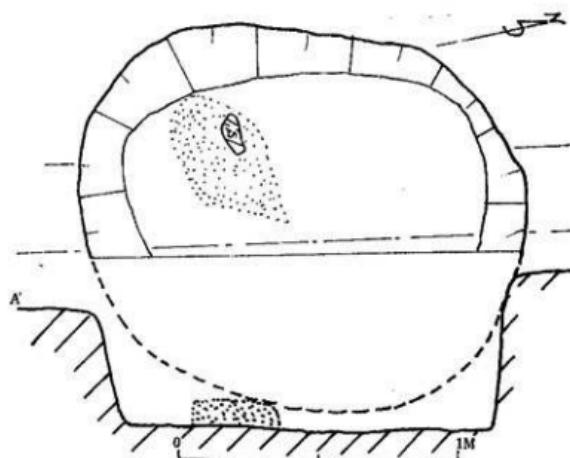
第8図 1号住居址実測図

第2号竪穴（第5  
図、図版Vの1）

この竪穴は第2号住  
居址東側に発見された  
ものである。径90cm  
のほぼ正円形を示し、  
深さは15cm前後であ  
る。壁ぎわに頭大位の  
礫が2コ認められたが、  
焼土および炭化物は認  
められなかった。性格  
は不明である。

第3号竪穴（第9  
図、図版Vの3）

この竪穴は東側半分  
をブルドーザーによっ  
て削土されたものであ  
る。プランは梢円形と  
思われ、推定規模160  
×140cmである。深さ  
南側35cm、北側50cm  
を示す。覆上中には  
無数のこぶし大の大き  
さの礫がつまり、中に  
は焼石も幾つか認めら  
れた。性格は不明であ  
るが、縄文前期末葉に  
みられる竪穴と変わ  
りないとと思う。（北沢雄  
喜、吉沢文夫）以上  
(吉村 進)



第9図 第3号竪穴

## 第Ⅲ章 遺 物

### 第1節 土 器

#### 完 形 品

##### 第2号住居址出土土器

###### 1. 第10図右(図版・VI上)

この土器は2号住居址東側床面につぶれた状態で出土したものである。

底部は平底で胸部にかけて斜傾し、更に外反状に拡がりをみせ、口縁部にてその様に達し、口唇部が逆く字型に強く内彎する深鉢である。口縁には蛇を抽象化したと思われる突起が四区分に施されている。実測団正面は蛇の頭部であろう。

底径13cm、口縁最大径24cm、器高24cmの均整のとれた土器である。色調は明るい黄褐色を呈す。砂の混入が若干みられる。器面調整は良好で焼成はよい。薄手である。

文様の施文手法は半隆線文のみであるが、文様構成は口頸部文様帶と胸部文様帶とに分けることができる。

口頸部文様帶は、口縁に平行する二条の半隆線によって横の区角がなされ、口唇には斜走、胸部にかけては縱の施文が行なわれている。胸部文様帶は口縁部と異なって三分画の構成からなっている。メガネ状の区角文、菱形文を三分画に配し、空間を縱の籠目文、縱走する隆線文で埋め、器面全体を幾何学的文様で飾っている。

本土器にみられる施文方法は繩文前期末葉下島直後形式になって出現してくるものである。この項の最後で問題を詳しく述べる。

###### 2. 第10図左上土器(図版VI下)

本土器は2号住居址中央尖焼土下より、口縁を床面に合わせて切られたものである。埋甕炉に使用されていたものと思われる。底部は上げ底を呈し、斜傾の立ち上がりを示めし、口縁部にてその極に達する円筒形の小型深鉢である。底径13.3cm、口縁部17.2cm、推定器高25cmである。色調は赤褐色を呈す。砂を多量に含み、焼成があまりよくないので器面はザラザラした感じをうける。厚さは5mmを示す。

口縁部は出土状態よりしては不明であるが、打ち欠かれたと思われる口縁部破片が出土しているので推定はできる。口縁に平行する一条の粘土組を横走させ、その上に竹管工具による爪形文を粗に施している。その下から底部にかけては、綾格文のある結節繩文を等間隔に施している。無文帶をはさんで綾格文の山の部分を左右対称に施文している。

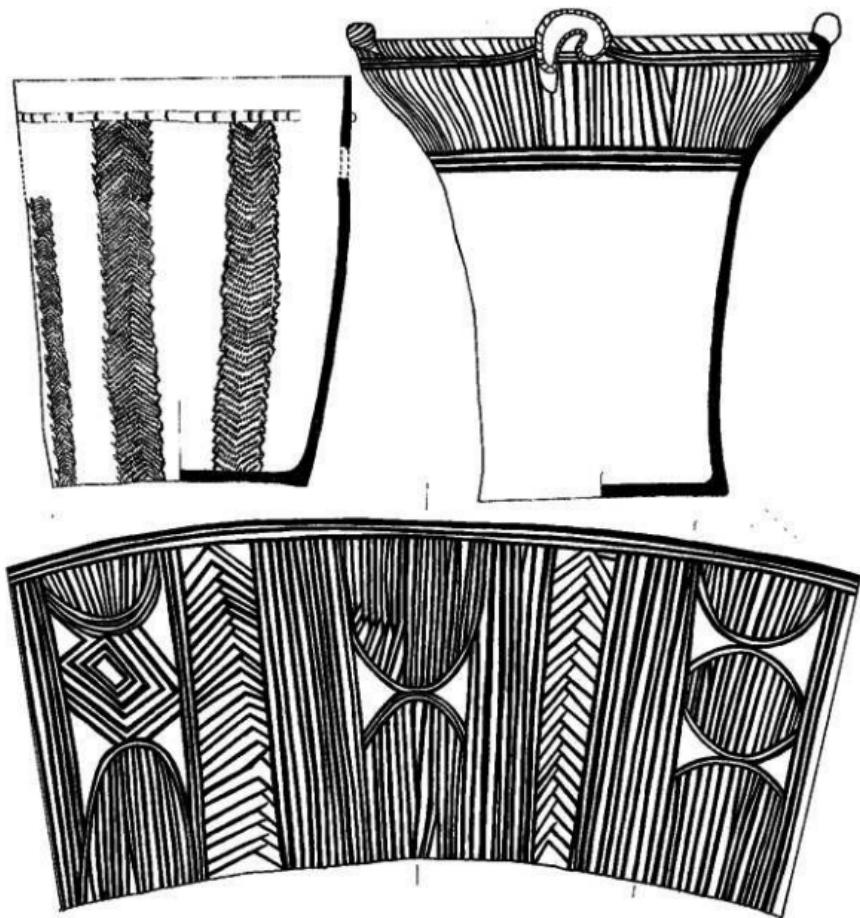
関東地方の下小野式土器に類似しているが、口縁部にみられる粘土組の手法は先行するものと思われる。東北の影響も考える必要がある。

##### 第4号住居址出土土器(第11図、図版Vの1)

この土器は4号住居址の中央やや東側に、底部を抜き、周囲を縛で固めてあったものである。中より粗悪なドリルが出土している。

口縁一部および底部は図上復原であるが、台付き土器である。龍崎遺跡出土土器に類似している。

富士山型の波状口縁を示めし、折り返し口縁である。胸部にはつまみ状把手を4コ持った帯状貼付隆帶がめぐらされている。つまみ状把手は口縁部波状の谷の部分に位置している。



第10図 第2号住居址出土土器 S=1/3

文様は半截竹管具による半陸線文が主体である。文様構成は太い沈線による、わらび手状、弧状、過巻文が施され、半陸線が埋めている。口縁部には三角沈刻文がみられる。副部の隆帯上には結節文がみられる。

中期への胎動がみられる上器である。以上3つの完形品について述べたが、下島直後形式に比定でき得るであろう。2号住居址のものは、その後半、4号住居址のものは、下島直後形式でも前形式の手法がかなり認められ、前半のものと考えられる。これらの土器にみられた、施文方法、文様構成については第5類土器において詳細する。

#### 第1類土器（第12図、1~5、図版2の2）

田の埋土よりわずかながら櫛文早期から前期初頭の土器片が出土した。



第11図 第4号住居址出土土器 ( $S=1/3$ )



第12図 第1～3類土器 ( $S=1/3$ )

1は楕円の押型文土器である。長石が若干含まれ、赤褐色に堅く焼かれている。文様は明瞭でなくくずれた感をうける。

2, 3, 4は胎土に纖維を多量に含み、器面に具設条痕のみられるものである。厚さは4mmで赤褐色に焼かれている。器面調整はあまりよくなく、纖維痕がみとめられる。

2は口縁部破片であるが、切りそいだ口唇部に連続的に指頭を加えている。3は屈曲のある胸部破片である。2, 3, 4は絶じて茅山上層式に比定でき得る。

5は黒褐色の厚手の土器で纖維は認められない。器面には沈線による格子目状の文様で飾られている。あまり類例はみられないが、長野県上伊那郡宮田村中越遺跡より出土した中越I式に比定でき得る。

#### 第2類土器（第12図、6~9、図版VIIの2）

諸畿内でも早い時期に属すると思われる一群を一括した。

6, 7は同一個体の胸部破片である。色調は黒褐色を呈す厚手の土器である。纖維はまったく認められず、長石、雲母を多量に含んでいる。器面調整は丹念でない。文様は縄文のみで、よりのゆるい原体を使っている。

8は朝顔型の深鉢の頸部で、口縁にかけて強く外反を示めている。口縁に平行に沈線を施し、胸部には粗雑な縄文を斜走させている。砂、長石が多量に混入されている。黒褐色を呈すが、表面には炭化物の付着がみられる。

9は諸畿B式に比定でき得る土器片である。砂や長石は若干認められるだけで、赤褐色に堅く焼かれている。半裁竹管具による平行沈線文をメガネ状に配し、ボタン状突起がみられる。

#### 第3類土器（第12図、10~17、図版VIIIの2）

多量の前期末葉の土器片と共に関西の影響を受けたことを物語るかのように関西系の土器が出士している。前期中葉のものと、末葉のものとに分けることができる。

10, 11は北白川下層Ⅲ式に比定できうる。口縁部に一段の隆帯をもち、く字型に内向する口縁部破片である。口縁に沿って粘土紐を数条施し、その上に竹管具による連続爪形文を施文している。白っぽい焼きを呈すのが普通である。

12~15はいわゆる大藏山式土器と呼ばれている一群である。器壁は薄いものが一般的である。あまり混入物は認められず、焼きは堅く良好である。

12, 14, 15のように壺形上器もみられる。波状口縁が普通である。12, 14は同一個体のものであるが極めて薄手である。器面には炭化物の付着がみられ、黒色を呈している。器面にあらかじめ、縄文を施し、その上に口縁に沿って三條の細い粘土紐を波状の頂点から流している。浮線上には、結節文がみられる。15は口唇の両面に粘土帶を貼付し、更に一条の粘土帶と半隆線を波状に沿って施している。粘土帶上にはよりの堅い縄文がみられる。波状の頂点には垂直に粘土紐を対称に貼付している。器内面には爪形の印刻が無数にみられる。

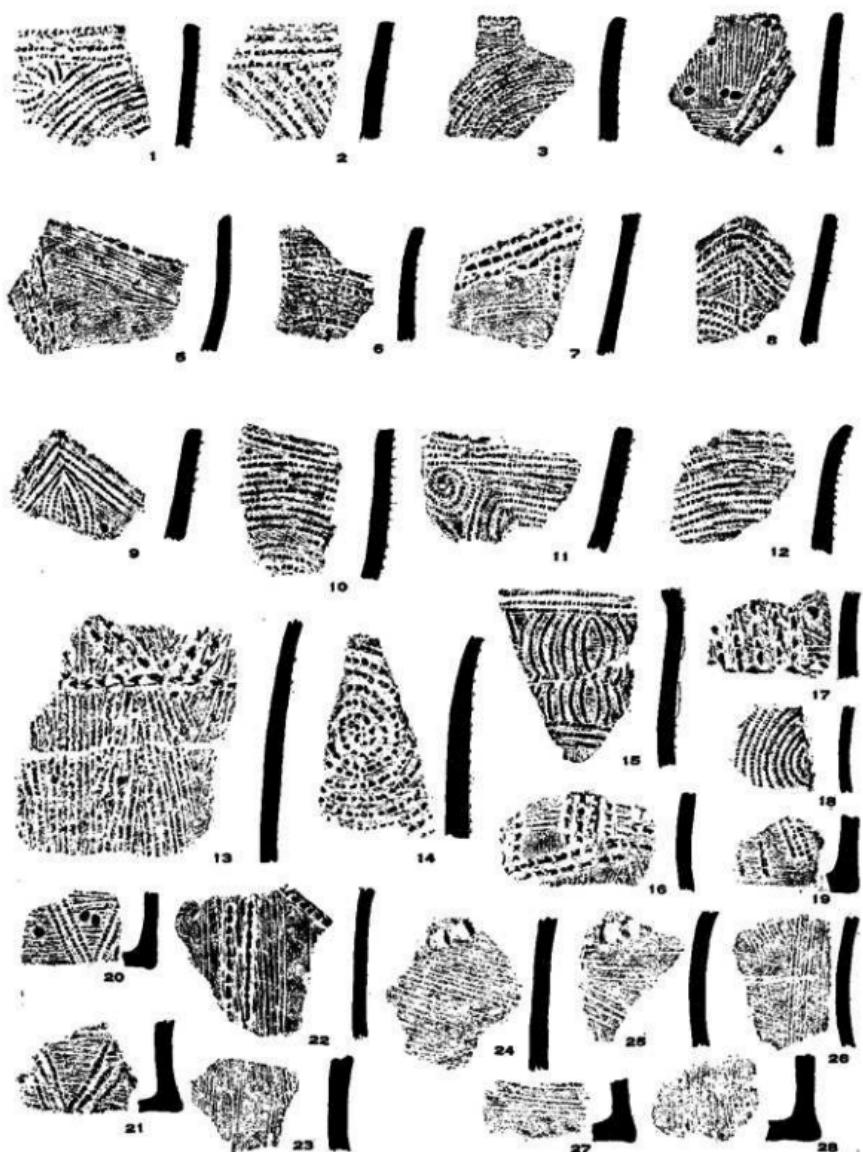
16, 17は同一個体の口縁部破片である。明るい赤褐色の薄手の土器である。口唇に竹管工具による刻みを有している。器面は燃りの堅い縄文を回転している。伊那谷ではあまり知られない土器である。一応本類土器として報告する。

#### 第4類土器（第13図、図版IX）

本類土器はいわゆる諸國C式に比定でき得るものである。第5類土器と共伴するが、伊那谷においては、この時期の資料に乏しく比較材料がないので、一応現在までの分類にしたがって、図版作成を行なった。

本類は文様構成上二種に分類することができる。

##### A種（1~22）



第13図 第4類土器 ( $S=1/3$ )

結節状浮線文の著しいものをA種とした。器型は底部が小さく、そりぎみの立ち上がりを示めし、外反状の口縁部にて最大幅を持つ、いわゆる朝顔型の深鉢である。口縁は波状のものと平縁のものがある。

色調は総じて黄褐色を呈するものが多く、中に黒褐色のものもある。胎土中に長石、砂を若干含む。焼成は全体に良好である。土器の厚さは5mm前後の薄手のものと、8~10mm位の厚手のものがある。

施文方法は器面にあらかめじ、半截竹管具による平行沈線文を斜走ないし、横走させ、その上に2mm前後の粘土紐を貼付け、その浮線上を同一竹管具による連続刺突を行なうことによって、結節状の文様を表出している。

文様構成は一様でない。浮線文には弧状、ないし、同心円状、あるいは、直線的なものがある。

口縁部文様構成は、口唇部に竹管具による緻密な連続爪形文を施し、その下に二条ないし三条の浮線文を口縁に沿って配し、胴部にかけて、同心円状あるいは弧状、レンズ状に等間隔に浮線文を施したもの(1~3, 6, 8~10)と口唇部から浮線文を直線的に施したもの(4.5)がある。この口縁部文様成の相違は全体にわたってみられる。

同心円状のものとして、1~3, 6, 8, 10, 12, 14, 18がある。口縁部から胴部にかけて器面を余すことなく飾っている。これらのものにはボタン状突起はみられない。

9, 15はレンズ状を呈するものである。9は口縁部破片で三条の浮線文を口唇に沿って横走させ、波状の頂点より三重のレンズ状浮線文を施している。15は頸部に段を持つもので、唯一の例である。三条の連続爪形文を有す浮線文を横走させ、その間にレンズ状浮線文を7重にして埋めている。この単位をもって器面を飾っている。9はボタン状突起をもつ。

直線的なものとして、4, 5, 7, 13, 16, 19~22がある。4, 5, 22は口縁部破片である。4は縦走する平行沈線文を地文として、その上に二条を一組とした浮線文をもって口唇を底辺とした三角形を作り、その内部にニコザツのボタン状突起を貼付している。5, 22は口唇部に連続刺突文をもち、二条の浮線文を一組として斜走させている。ボタン状突起はみられない。13, 16は胴部破片である。13は縫杉状に沈線を走らし、二条の浮線文を斜走させている。19~21は底部である。どれも三条の浮線文を一組としている。20にはボタン状突起がみられる。

#### B種 (23~28)

平行沈線文の著しいものをB種とした。本種はA種に比較して、沈線文が密でない。A種同様明るい黄褐色が一般的である。長石や砂はかなり多量に含まれており、ザラザラした感がある。焼成は総じて良好である。

文様構成は沈線文の斜走するもの(24, 25, 27)、縦走するもの(23, 26, 28)がある。

24, 25は胴部破片である。器面には指による押圧を加えて耳状の小突起を表出している。27はく字型の立ち上がりを示す底部破片である。26は縦位の集合条線文を間隔をおいて施し、その空間部を横走する集合条線文で埋めている。28は底部破片で平底を呈し、立ち上がりは直に近い。まばらな平行沈線文がみられる。

A種の5, 22は本種の口縁部とも考えられる。

#### 第5類土器 (第14図、図版K)

本類土器は諸陵C式の直後に比定され得る一群、いわゆる下島直後形式の土器である。この一群の土器の分類は上原遺跡において六種類紹介されているが、ここでは大きく三種に分けてみた。

#### A種 (1~9)

施文方法は前形式の手法を継いだものである。地文に半截竹管具による平行沈線文を斜走、縫杉状に走らせ、その上に粘土紐を貼り付けている。前類土器にみられた結節状文は消えて、緻密



第14図 第5類土器 ( $S=1/3$ )

な刻目が施されている。

口縁部は連續爪形文がみ受けられるが、ボタン状突起は認められなくなる。

器型はやはり朝顔型の深鉢が一般的である。厚さは総じて厚手で8~10前後である。胎土中に長石、砂を多く含むがザザラした感を受けないのは器面調整が丹念なためであろう。焼成は全体に良好である。

3は口縁部破片である。口縁に平行する粘土紐を貼り付け、浮線上には深い刻目を持った格子目文が施されている。

文様構成は全体に曲線状のものが多い。1は頸部に段を有し、そこに二条の浮線文を配し、更に下部に二条の浮線文を走らせて区角を作り、中には四条を一組とした、直線、鎖状、弧状の浮線で飾っている。

鎖状のものとしては2がある。4、8は鎖状と連続するO字文との組み合せである。5は地文の沈線が深く、二重の貼り付けに見える。6は口縁部近くに一条の連續爪形浮線文を横走させ、それより弧状に浮線文を走らせている。しかし浮線上には刻目がみられない。7、9は弧状、同心円状のものである。共に浮線上の刻目は粗である。

#### B種 (10, 11)

前種にみられた粘土紐による文様は消えて、竹管具による窓切隆線文がでてくる。土器の厚さは薄手である。胎土中に砂をかなり多量に含み、ザザラしている。

11は口縁部破片である。口唇に連續爪形文を走らせ、口縁にそった三条の隆線文、更に鎖状の隆線文が施されている。

10は渦巻文と連続する鎖状文との組み合せにより器面全体を飾っている。

#### C種 (12~29)

半截竹管具による平行沈線文の深いもの、即ち半隆線文の一群である。施文方法は竹管を器面に強く押しつけている。そのため断面が漏斗形を示すのが大きな特徴である。

器型は朝顔型の深鉢のはかに、口縁がく字型に内凹する深鉢や、頸部に段を有し、胴部にふくらみを持つ斐形土器も出現てくる。口縁は平縁のものと波状のものとがあり、23のように富士山型の波状を呈し、ひねり餅状の突起をもつものもあらわれてくる。また折り返えし口縁もよくみられるようになる。色調は黄褐色に焼かれたものが多く、黒褐色、まれに赤褐色のものもある。

土器の厚さは全体に厚手のものが多く、8mm~10mm位である。薄手のものは概して器面調整が粗雑である。

口縁部の文様構成は口縁に沿って二条ないしは三条の半隆線文を走らせ、統いて器面を余すことなく鎖型の文様を連續的に施してある。中には18、25のように三角文を形成するものもある。19は頸部に半隆線文をめぐらして、鎖型と三角文によって器面を飾っている。内部に2コのボタン状突起を持つ。20、21はレンズ状のものである。23は富士山の口縁に2コずつひねり飾状の突起をもつものである。口縁にそって、四条の隆線をめぐらし、胴部にかけて三角文の幾何学文様を表している。24は連続O字状文のみられる例である。27~29は新しい要素を持った一群である。27は口縁が内凹し、底部の小さい深鉢である。横の隆線文で区画し、その中を鎖状の隆線文をめぐらして斜走する格子目文で埋めている。28は口縁部破片で縦目文が横位に施されている。29は平底でく字型の立ち上がりを示す底部破片である。格子目文が主体をなし、無文帶もみられる。27~29は以前説明式と呼ばれていた一群である。本類土器中、後半に位置すると思われる。本種の文様構成は第4類A種に非常に類似している。結節浮線文を本種の半隆線文に置きかえてみるとそっくりそのままであり、注目すべきことである。

以上当遺跡より出土した土器について述べてきたが、問題となる点について若干ふれておくことにする。

第4類土器にみられる平行沈線文は前形式即ち、諸葛B式の踏襲であり、それは結節状浮線

文、更に、第5類A種みられる一群の土器の地文化となって、徐々に主体を失ないつつ、半陸線文へ変ってくる。第4類にみられる結節状浮線文は、次の時期になると結節は消えて、割目になってくる。しかし粘土紐による装飾は帯状貼り付と引き繼がれ、中期の土器の祖となるのである。施文方法は異なっても、その文様構成は非常に類似している点、やはり第5類土器は新らたな要素を含みながらも諸縦式の亞流といえるのではないだろうか。関東の諸縦式直後に比定され得る十三落提式に第5類土器は種々な点で類似しているが縦文があまり発達していないことは地域性の問題となろう。

次に完形品についてであるが、第2号住居址より出土した二個体は同時期のものとしたい。円筒形土器にみられる結節縦文は五領ヶ台式にみられるものであるが、口縁部に貼付された粘土紐手法は第5類土器の範疇に入るもので、あえて分類するならば、第5類土器の新しい時期に属する。第4号住居址より出土したつまみ状の突起をもった台付き土器は出土例は珍しく、長野県高士見町鎌田遺跡出土のものに非常に類似している。浮線文はみられないが、貼付帯上の結節文(連続二字状文)がみられるなど、第5類土器の前半に位置するものである。

文様、施文方法により、同時期の一群を分けてきたが、今回出土した三つの完形品からすると器型に応じた、文様や施文が行なわれていたことも相起される。資料も当地方においては乏しく明確になっていない点もあるので、簡単に問題となる点を触れてみた。  
(吉村 遼)

## 第2節 石器

今回の発掘により出土した黒耀石の剣片の量は多量をきわめ、石器総点数の十数倍にのぼる。打製石斧、円形特殊石器以外は全て黒耀石で占められ、石器以外にも、チャートおよび頁岩の出土は全く認められず、発掘面積が小範囲にしてもこのことは注目すべきことである。

### 1. 石鎌 (第15図1~13, 8図版X)

当遺跡出土石器中、石鎌は半分を占める。剣片鎌も十数点みられる。形態を大きく分けると、五角形のもの、正三角形のもの、二等辺三角形のもの、剣片鎌、特殊な石鎌の5種類できる。

五角形のものとしては1があり、断面は長菱形を呈し、抉り込みは深い。

正三角形のものとして2~4の3点がある。共に基部近くにふくらみをもち、五角形に近い形態を呈す。先端の調整はあまり丹念でない。共に断面は台形を示し、緻密な調整がなされていて。

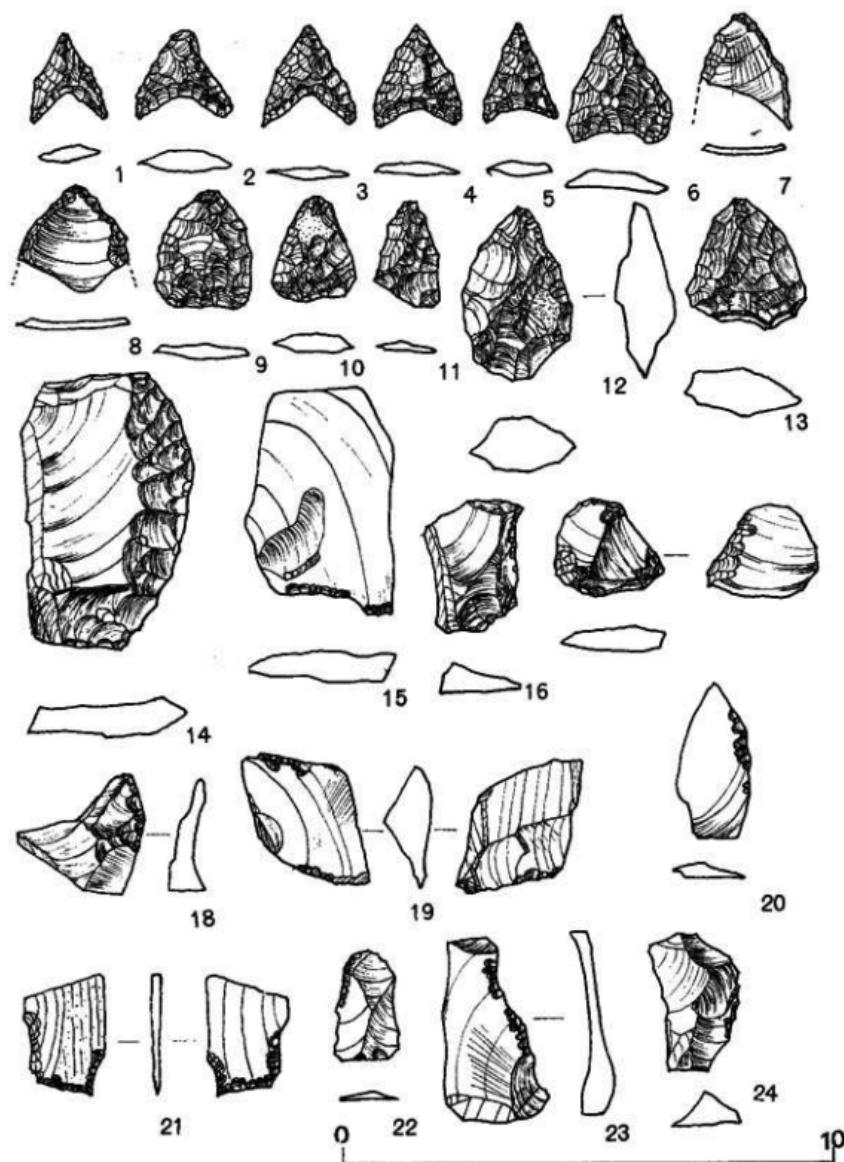
二等辺三角形のものとして、5, 6がある。断面は台形を示す。基部の抉り込みは前者より若干浅い。

剣片鎌としては、7, 8がある。他にも調整途中のものがある。断面には稜をもたず、若干調整をはどこしているだけである。頭部や基部を欠損したものが大部分である。

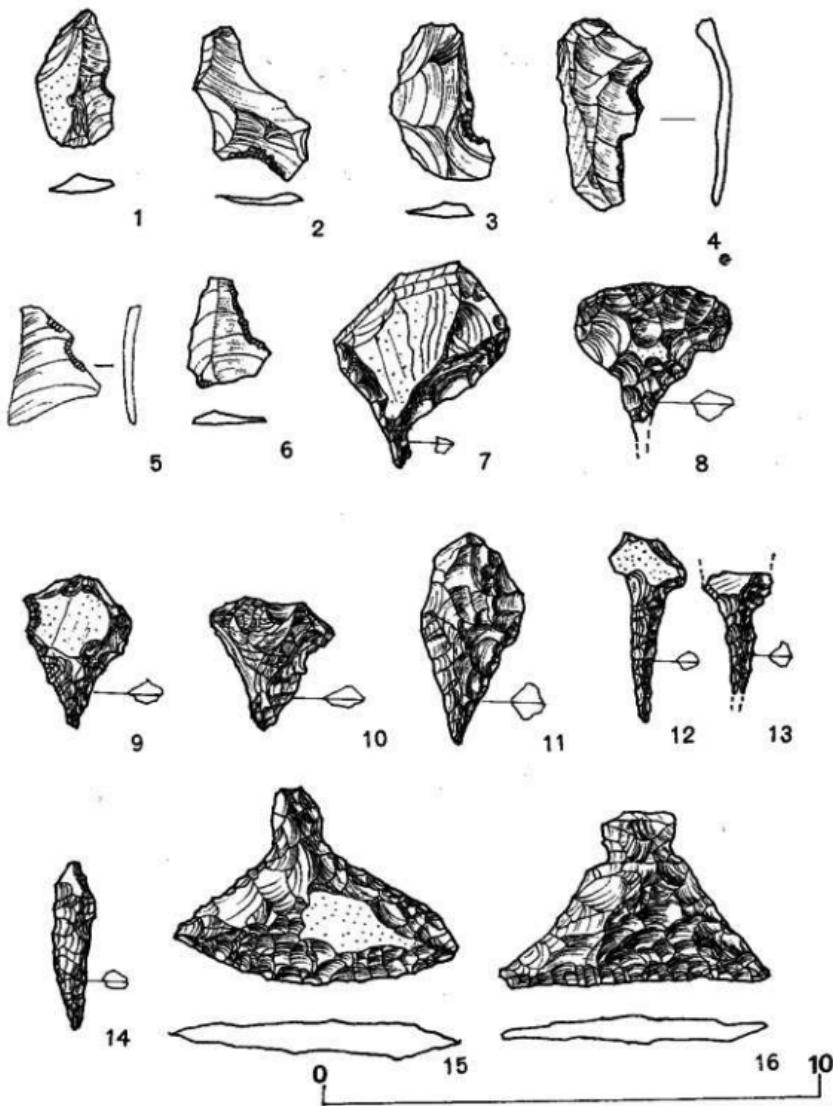
特殊なものとして9~13がある。9~11は形態からすると二等辺三角形の範疇であるが、一部自然面を残し、調整が比較的粗雑である点、基部における抉り込みがほとんどみられない点からして、一応特殊なものとした。調整途中のものかも知れない。12, 13は断面が分厚く、調整は粗雑で自然面を残している。大形の石鎌である。

### 2. 撃器 (第15図14~24, 第16図1~6, 図版X)

形態的、機能的に種々あるが一括して報告する。製作方法は大体が、剣片に若干の刃部を作出したものが多い。一般的なものとして14があり、大形で両面に調整がなされた優品である。剣片を利用して、若干の刃部をつけたものとして、15~24がある。大部分は片刃であるが、中には17, 19, 21のように両刃のものもみられる。21は両面から調整を行ないつつ、一端を鋸くところとして、石錐の機能を兼ねたものもある。17, 19は表と裏と異った部分に刃をついている。機



第15圖 石器(石鏽, 挖器)



第16圖 石器標器，石錐，石匙

能的に特徴あるものである。

第16図1~6に載せたものは、搔器として特異なものである。いわゆる抉状搔器の類である。製作技法は剥片に部分的に抉り込みを作り、片面から調整し、刃部を作出するものである。中に表裏交互に刃部を作出したものがみられる。この種のものは一般の搔器と違い、加工器と思われる。

### 3. 石錐（第16図7~14）

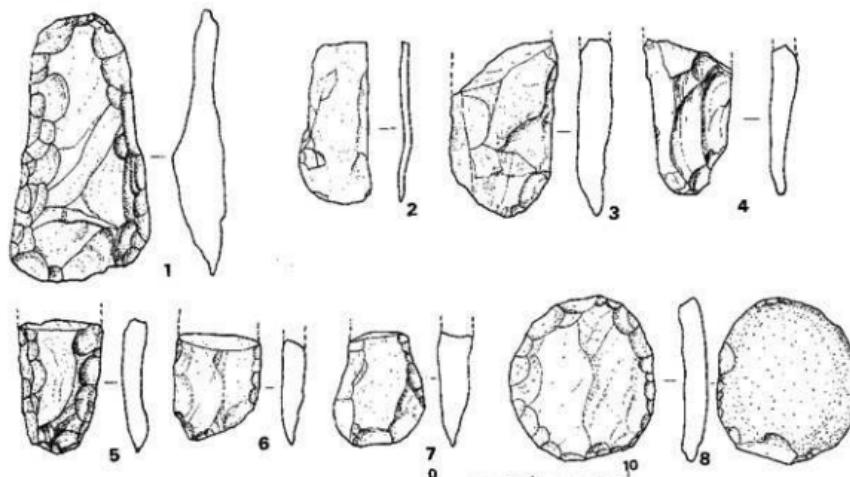
出土した石錐は、第1次剥離面を残したままの粗雑なものが多い。基部はほとんど自然面に大きな打ち欠きがみられるだけである。7、8は基部が大きく、錐部は比較的細い。9~11は胸部に抉りがほとんどみられない。大型の石錐かも知れない。12、13は7、8に比べると基部と錐部との調和がとれている。14は尖頭器的要素を持ったものである。7、12、13は錐部が左右対称でなく、回転穿孔には不適当と思われる。特殊な穿孔用具として考える必要がある。

### 4. 石匙（第16図15、16）

わずか2点出土したのみである。共に横型のものである。15は刃部がゆるやかな外反状のカーブを描く。16は直線的な刃部をもつ。調整は共にあまり丹念でなく、15は自然面を残している。

### 5. 打製石斧（第17図1~7）

今回出土した打製石斧は10数点を数えるが、完形品は1点のみで、頭部を欠損したものがほとんどである。石材は硬砂岩が主で、4のみ緑泥岩である。全体に調整は粗雑である。形態は全て撥形である。



第17図 打製石斧、円形特殊石器

## 6. 円形特殊石器（第17 図8）

この種の石器は、縄文早期から中期にかけてかなり出土の例がみられるが、今まで正式な報告もなく注目されていなかった。硬砂岩を半分に打ち欠き、截断面に若干の刃をつけたものである。5カ所の打撃痕がみられる。用途は不明であるが、特殊な石斧かも知れない。（吉村 進）

## 参考文献

「日本の考古学縄文時代」	河出書房	昭和40年
「上原」 長野県埋蔵文化発掘調査報告書第二		昭和32年
「有明山社」 „ 長野県考古学会研究報告書 9		昭和45年
「龜畠遺跡」 考古学集刊 4		

## 第IV章 まとめ

農業構造改善事業といふまことに大規模の工事の中で実施された羽場下遺跡の発掘調査の状況は、前述のとおりである。この調査の過程において把握し得た二、三の問題について今後の研究と保存措置の参考に資したい。

まず第一は、本遺跡の規模と立地についてであるが、本遺跡は相当古い時代より開墾が行われたため、遺跡地の大方が水田化され、遺跡地点を適確に把握することが困難な状態である。今回は調査日程の制限もあり、遺物の散布状況と地形より判断し総面積10000m<sup>2</sup>中実際に発掘し得た面積は800m<sup>2</sup>である。そのうち竪穴式住居5箇と窓穴3箇を調査した。そのうち縄文式前期末4箇、土師式住居1箇の存在が確認されたのであるが、前述のように遺物の出土状況からして相当な規模の集落が存したものと推定される。本遺跡を取まく遺跡は、東方300mに早期を代表する舟山遺跡、西方400mに大城林遺跡があり、有舌尖頭器・前期末・中期末の大集落址が発見されている。これらの遺跡は本遺跡とは一連の関係にあるものであると考えられる。

第二は遺物について本遺跡上の土器は、縄文早期、縄文前期、土師である。そのうち縄文式を5類に分類を試みた。

第1類土器 この上器は、水田の埋土中より出土した早期～前段の上器、1は文様が明でないが押型文土器、2, 3, 4は織維を多量に含み貝殻条痕文と口唇に指頭が加えられた土器、総じて茅山土器式に比定される一群5は、織維を含まない沈線による格子目状文、中越I式に比定されるもの。

第2類土器 6～8縄文のみで織維の認められない諸段階の早い方に所属される一群。9は、半截竹管具による平行波線文がメカネ状に配し、ボタン状突起がみられる諸段階に比定されるもの。

第3類土器 前段中葉と前段末葉の土器。10～11は、粘土紐を施し竹管具による連続爪形文を施した北白川下層Ⅲ式に比定できる一群。12～15は混入物の認められない薄手の焼きのよいもの、いわゆる大嵐山式といわれている土器。16～17は器面に縄文を回転させ、口唇に竹管具による刻みをつけたもので、伊那地方ではあまり知られていない土器であるが本類に含めた。

第4類土器 本類は諸段階C式に比定できるもので、第5類土器と共に伴う土器で、伊那地方ではこの期の資料は比較的乏しい存在である。本類を文様構成：A種・B種に分け。A種1～22、結節状浮線文の著しいもの、器形は朝顔型深鉢。B種23～28、平行波線文の著く発達したもの。

第5類土器 本類は諸段階C直後に比定される一群、いわゆる下島山後形式といわれている土器である。これをさらに3種に分け、A種は1～9、前形式の平法が受け継かれ、地文に半截竹管具による平行波線文を斜または菱形状に走らせ、その上に黏土紐を貼り付ける文様構成。前類

に見られる結節状文は影をひそめて緻密な刻目が施される。器形は一般的に朝顔型の深鉢。

B種 粘土紐が消え竹管具による寛切隆線文となる。11は、口縁部に三条の隆線文と鎖状の隆線文が施されている。10は渦巻文と鎖状文が器面全体に施されているもの。

C種 半截竹管具による平行波線文の深いもの、竹管を強く押したため面が蒲鉾形をなしたのが特徴。器型は朝顔型深鉢と要。

以上分類の概略をまとめると、第1類土器は別として、第2類以降は関西系の土器は直移入ではなく、少なからず地域的な差違を示すものと思われるところに注意したい。第4類土器の平行波線文は、第3類形式の諸説のなごりで、結節状浮線文が更に半隆変線文に変って行く。第4類の結節状浮線文は、次時期には刻目になりやがて中期に於ける粘土紐貼付に発展する。第5類土器は関東の諸説式直後の十三菩提式に類似しているが、繩文の発達が認められないのは地域的な現象であろうか。

次に、堅穴住居址、第3号住居址のプランは略円形と推定される。第2号住居址に依って切り取られ三ヵ月状に一部を残すだけである。床面のピットは多いよおに見受けられるが、明らかな柱穴はP<sub>1</sub> 1箇と考えられる。床面出土遺物より諸磯期の古いもの。住居址の大きさは直径7mに達する大形の住居址である。

第2号住居址は、第3号住居址に切込んで作られたもの。第3号住居址と同じぐらいのプランを有する大形の住居址。床面発見の土器より下島直後形式である。第4号住居址は、第2、3号より南20mの位置に発見された住居址で、道路のため約半分切られた状態で発見、その径は4.5m×4m卵型。柱穴は明でないが、多柱穴によるものか改築によるものが現在のところまだかでない。出土土器より籠焼遺跡より出土した土器に類似している。

第5号住居址 2、3号住居址の西側単独に出土した住居址プランは明らかでないが東西約9m、南北7mの橢円形らしい。床面に発見された柱穴の配列状況と、焼土よりして複合か拡張か判断に苦しむ。床面は舟底でレベル差が認められない。ここでは現況を報告しておきたい。出土遺物は諸磯式、下島式直後形式が出土している。

第1号住居址は4.3m×4.4m方形堅穴住居、柱穴は3箇、西側に石組カマド煙道がわずか認められた。土器は土師後期。

堅穴3箇発見したが、そのうち1、2号は遺物を伴わないので時期不詳。3号は径1.6×1.4×0.5m川土遺物は繩文前期末葉の土器が出土した。この期に属する可能性が強い。

石器、石器については前述のとおりであるが、川土状態にまだ問題が残されているのが後日の報告を予定している。

終りに当って、羽場下遺跡発掘調査について記録の漏れたところを付してまとめとしたい。

1. 羽場下遺跡は、長野県駒ヶ根市大字赤穂南郷羽場下地籍の台地上に位置する。

2. 本調査は駒ヶ根市教育委員会と長野県南信土地改良事務所との契約によって行われた埋蔵文化財の記録保存事業である。(国・県・地元補助対象事業)として昭和46年7月実施し面積800m<sup>2</sup>を調査、内繩文式前期末葉住居址4、土師住居址1を発掘した。

3. 本遺跡の調査は極めて限定された地域に止まつた結果、集落の一部の検出を見たのみで終り、羽場下遺跡の全体的な面に及ばなかったのは、誠に残念であった。

4. この記録保存に当っては、県当局の係官諸氏はじめ北沢教育長、駒ヶ根博物館長 小池金義、現場主任 福沢正陽、団長の補佐を受けた明治大学生 吉村進氏の熱意と御協力に深甚なる感謝の意をささげたい。

(友野良一)

注 1. 信濃資料刊行会

信濃資料 第1巻 下

昭和31. 3. 31

2. 杉原藤介編集

日本考古学講座(3)

昭和31. 5. 30

3. 長野県教育委員会

上 原

昭和32. 12. 14

4. 山内清男

日本原始美術(I)

昭和39. 3. 10

5. 錦木義昌 日本の考古学(II) 昭和40. 7. 30  
 6. 上伊那郡教育委員会 上伊那誌 歴史編 昭和40. 10. 1  
 7. 大場哲雄・八橋一郎 考古学講座(3) 昭和46. 5. 25  
 内藤政道  
 8. 藤沢宗平 有明山社 長野県考古学会研究報告書9  
 昭和44. 3.  
 9. 原嘉蔵・藤沢宗平編 唐沢・洞 長野県考古学会研究報告書10  
 昭和46. 3



参加者記念撮影

参加者名簿

倉田 正義	倉田日出平	和田 武夫	小町谷すみ子
大野吉五郎	田中 春子	駒場 和市	堺沢かめよ
塩沢 博	土屋 嘉之	下村 修	(順不同)
倉田源重			

舟 山 遺 跡 (第Ⅲ次調査)

## 目 次

目 次.....	(3)
図 版 目 次.....	(4)
図 版 第十八第—第三十六 .....	(5~23)
本文	
第一章 前次調査の概要.....	(林 茂樹) (24)
第二章 発掘調査の経過.....	(25~32)
第一節 記録保存事業の経緯.....	(福沢 正陽)
第二節 調査団の組織.....	( )
第三節 発掘作業日報.....	( )
第四節 発掘調査の経過.....	(林 茂樹)
第三章 遺 構.....	(本田 秀明) (33~38)
第四章 遺 物.....	(39~56)
第一節 土 器.....	(吉村 進)
第二節 石 器.....	(田中 清文)
第五章 所 見 と 考 察.....	(林 茂樹) (57~59)
〔編集 林 茂樹〕	

## 図版および挿図目次

### 〔図 版〕

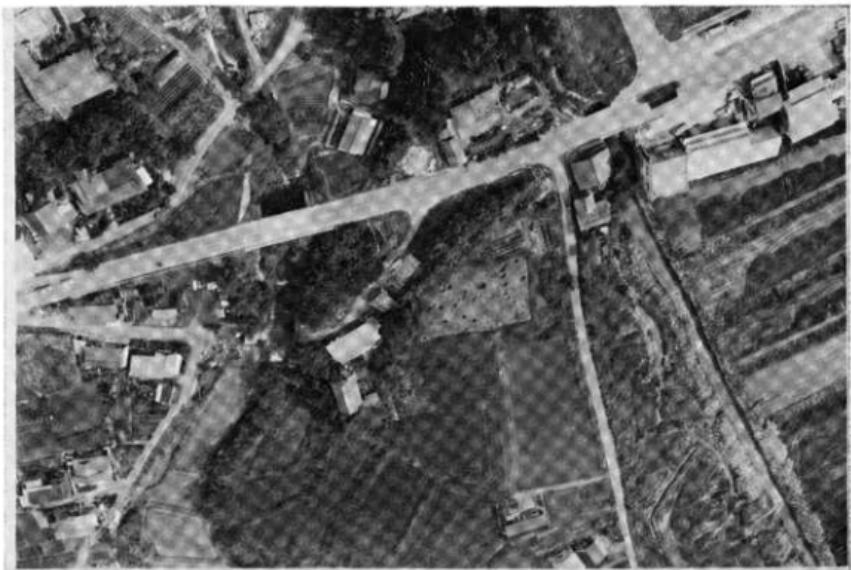
第十八	(上) 舟山丘陵航空写真	5	第二十七	小窓穴址 A <sub>3</sub> 型	14
	(下) 発掘区全景	5	第二十八	小窓穴址 B 型	15
第十九	第Ⅲ層上面遺構全景	6	第二十九	遺構および遺物出土状況	16
第二十	同 I 区, II 区, III 区断面	7	第三十	第Ⅲ層内出土土器 (I, II, III)	17
第二十一	相並ぶ小窓穴	8	第三十一	第Ⅱ層内出土土器 (IV AB)	18
第二十二	小窓穴址 A <sub>1</sub> 型	9	第三十二	第Ⅱ層内出土土器 (IV C)	19
第二十三	小窓穴址 A <sub>2</sub> 型	10	第三十三	第Ⅱ層内出土土器 (IV D)	20
第二十四	小窓穴址 A <sub>3</sub> 型	11	第三十四	第Ⅱ層内出土土器 (IV F)	21
第二十五	小窓穴址 A <sub>4</sub> 型	12	第三十五	第Ⅱ層内出土石器	22
第二十六	小窓穴址 A <sub>5</sub> 型	13	第三十六	第Ⅱ層内出土石器	23

### 〔挿 図〕

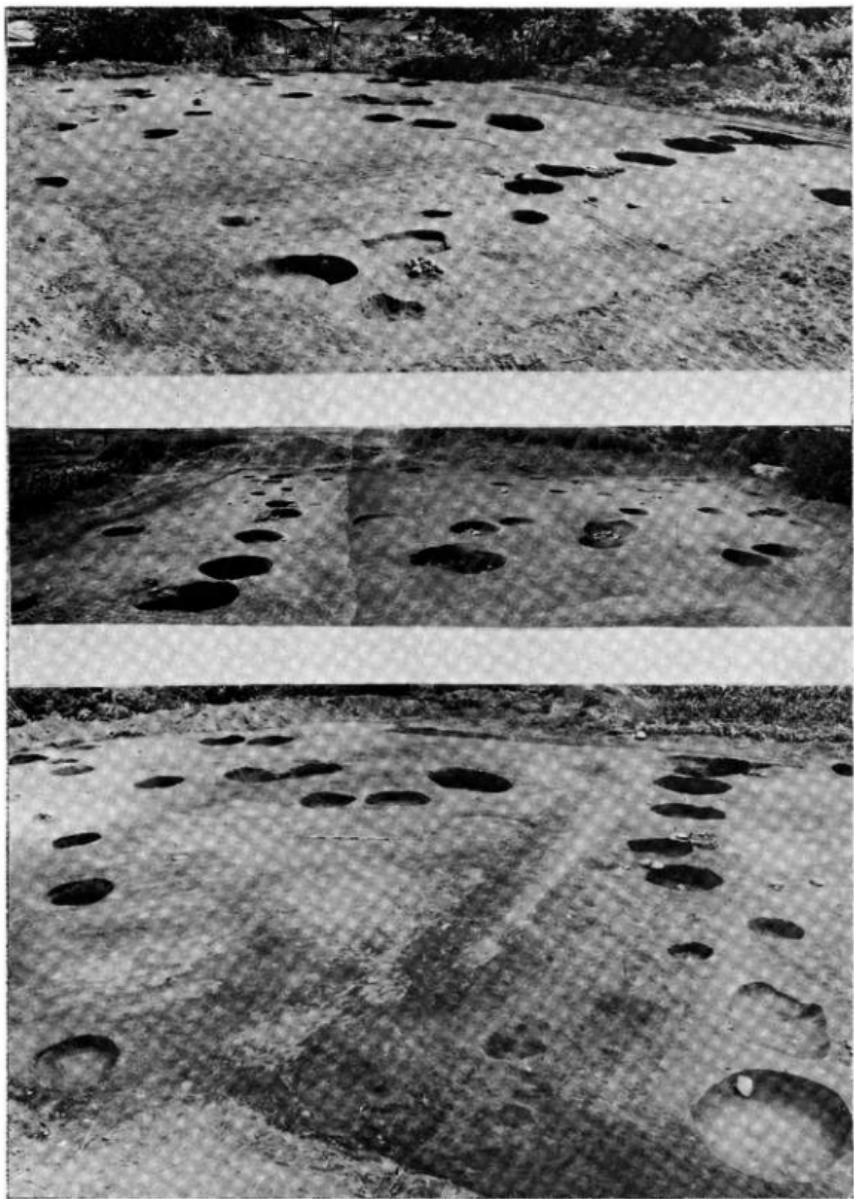
第32図	舟山遺跡地形実測図	25	第41図	出土土器拓影 (IV B 類)	44
第33図	第Ⅲ層調査遺構全測図	30	第42図	出土土器拓影 (IV C 類)	46
第34図	第V区発掘状況	32	第43図	出土土器拓影 (IV D, E 類)	47
第35図	舟山遺跡の地層実測図	32	第44図	出土土器拓影 (IV F, G 類)	48
第36図	遺構実測図	33	第45図	土製耳栓実測図	50
第37図	遺構実測図	35	第46図	出土石器実測図 (石礫, 尖頭器)	52
第38図	遺構実測図	37	第47図	出土石器実測図 (搔器, 石匙)	53
第39図	出土土器拓影 (I, II 類)	40	第48図	出土石器実測図 (搔器, 石匙)	55
第40図	出土土器拓影 (III, IV A・13類)	42	第49図	出土石器実測図 (搔器, 彫刻器)	56

### 〔注〕

- ・写真撮影および図版構成 林 茂樹
- ・地形および遺構実測図作製 吉村 遼
- ・土器拓影図作製 吉村 遼
- ・石器実測図作製 田中 清文



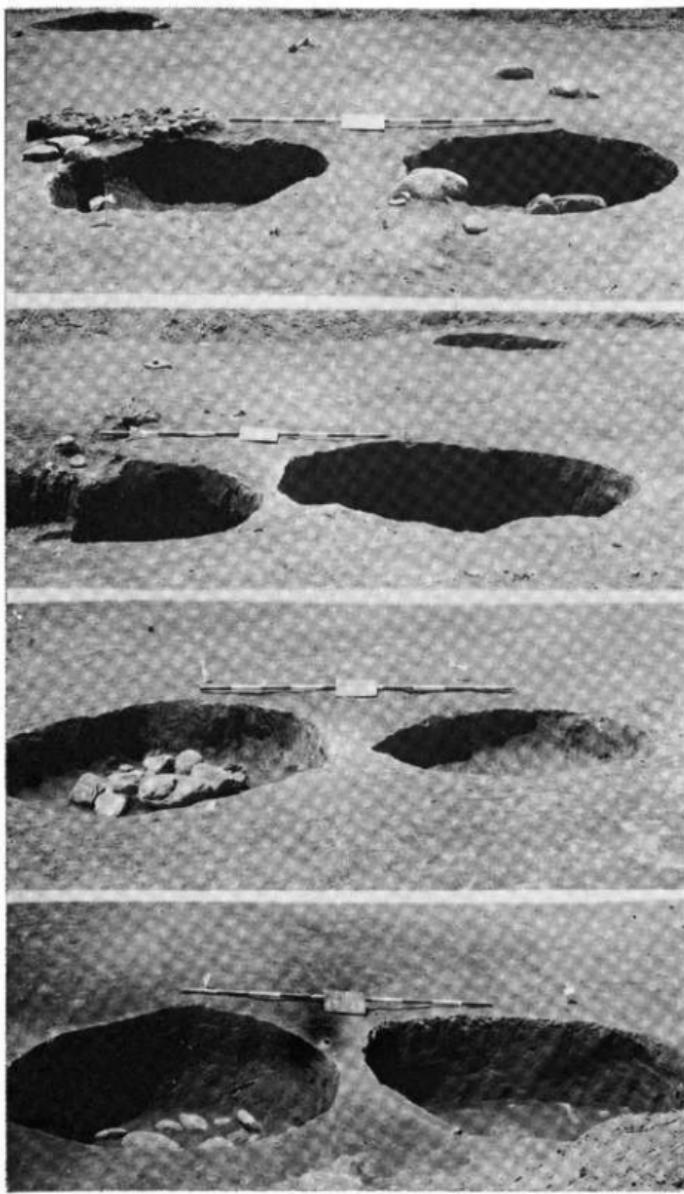
圖版 第十八 (上) 舟山丘陵航空写真 [北→側] (下) 発掘区全景 [北→左側]



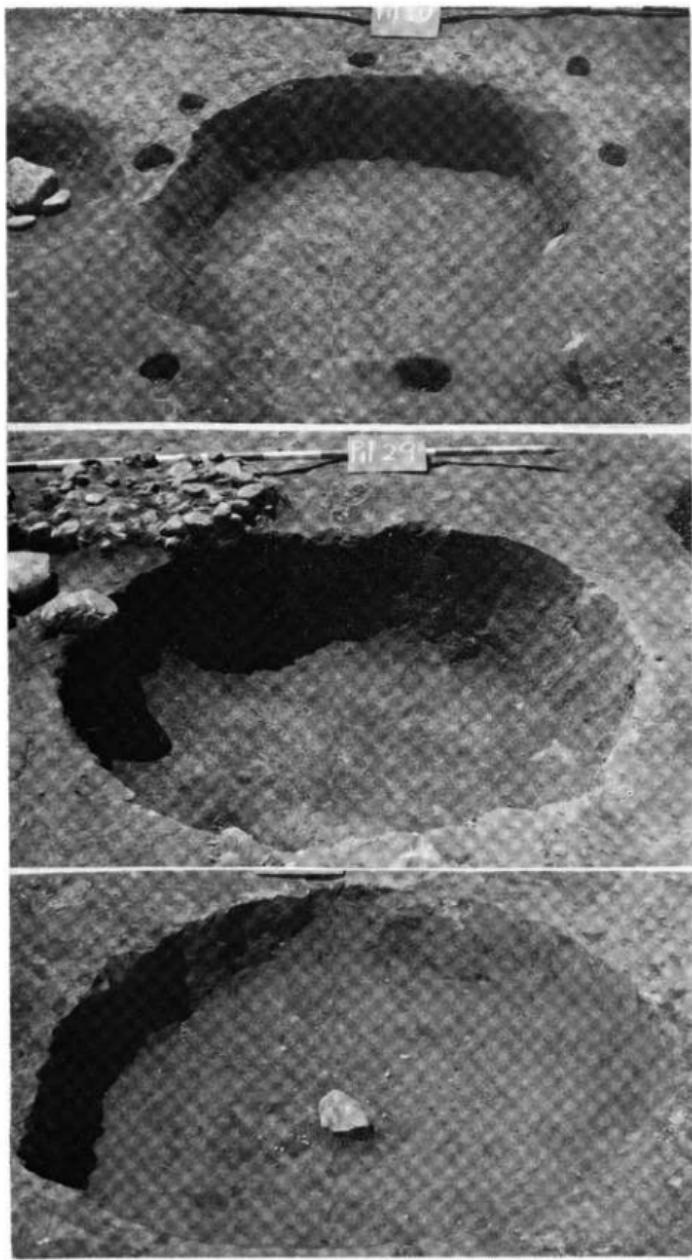
図版 第十九 第Ⅲ層上面遺構全景（上 西南より・中 東方より・下 西方より）



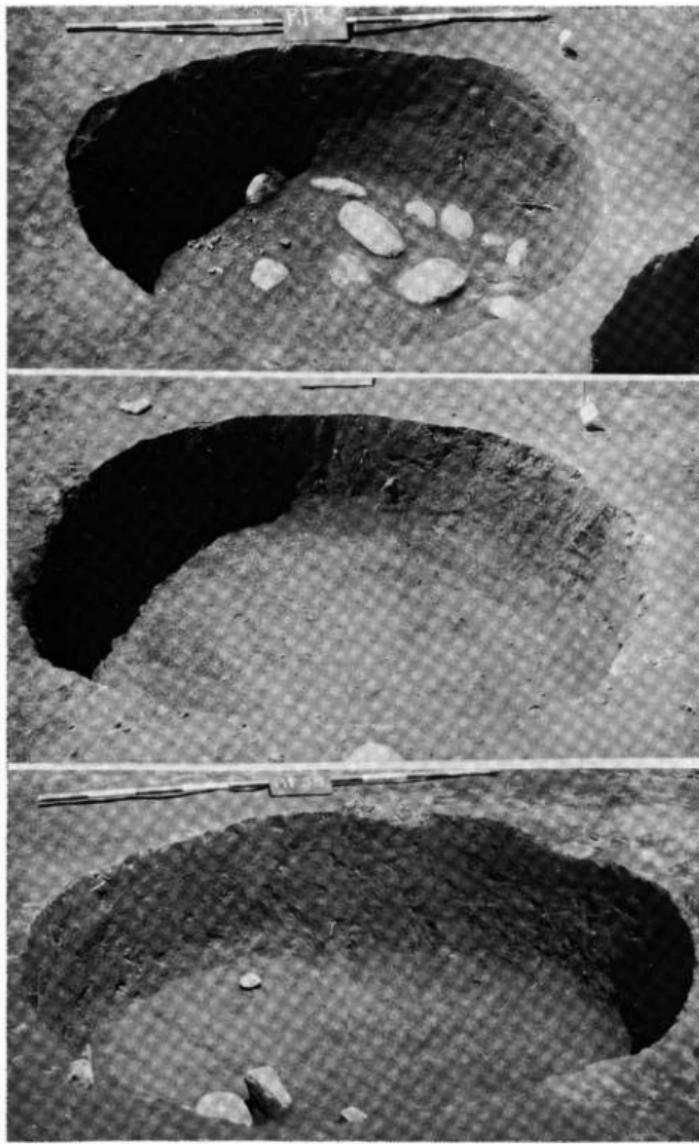
圖版 第二十 第III層內遺構全景（上 第III區，II區·中 第V區，下 第V區地層斷面）



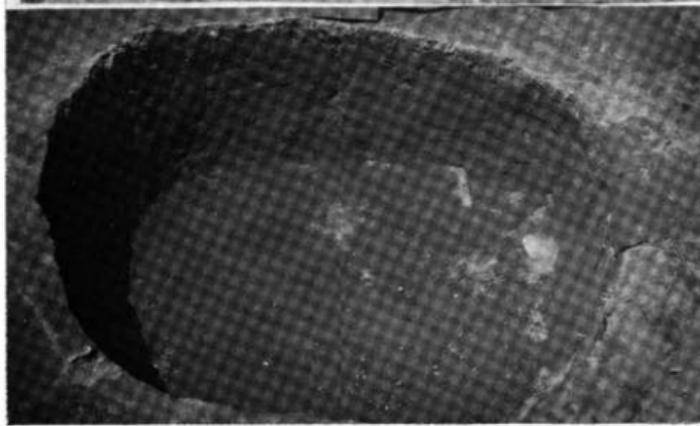
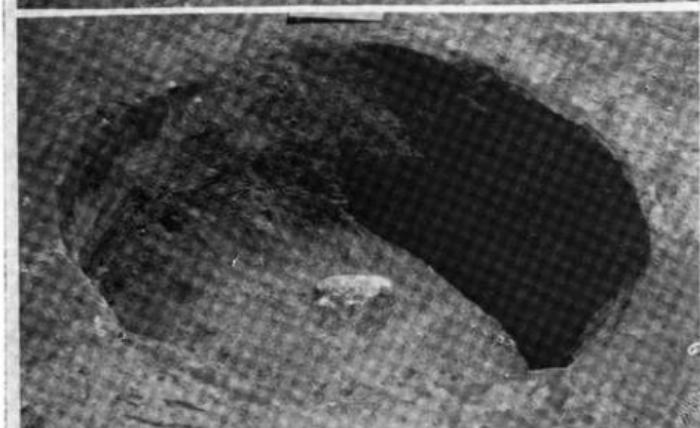
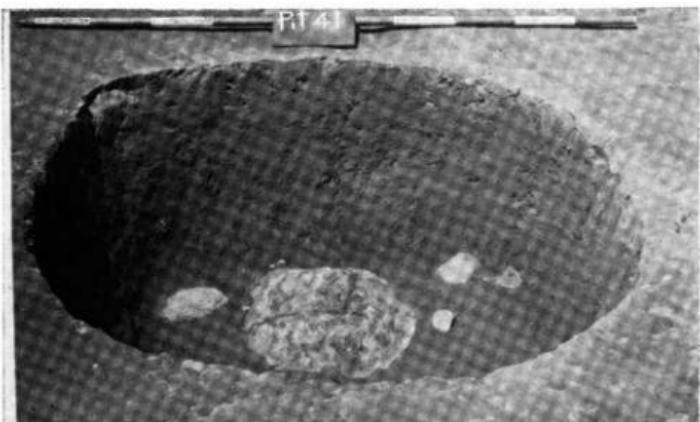
圖版 第二十一 相並ぶ小堅穴 (1. 29号址—30号址 2. 7号址—33号址  
(3. 22号址—13号址 4. 43号址—42号址)



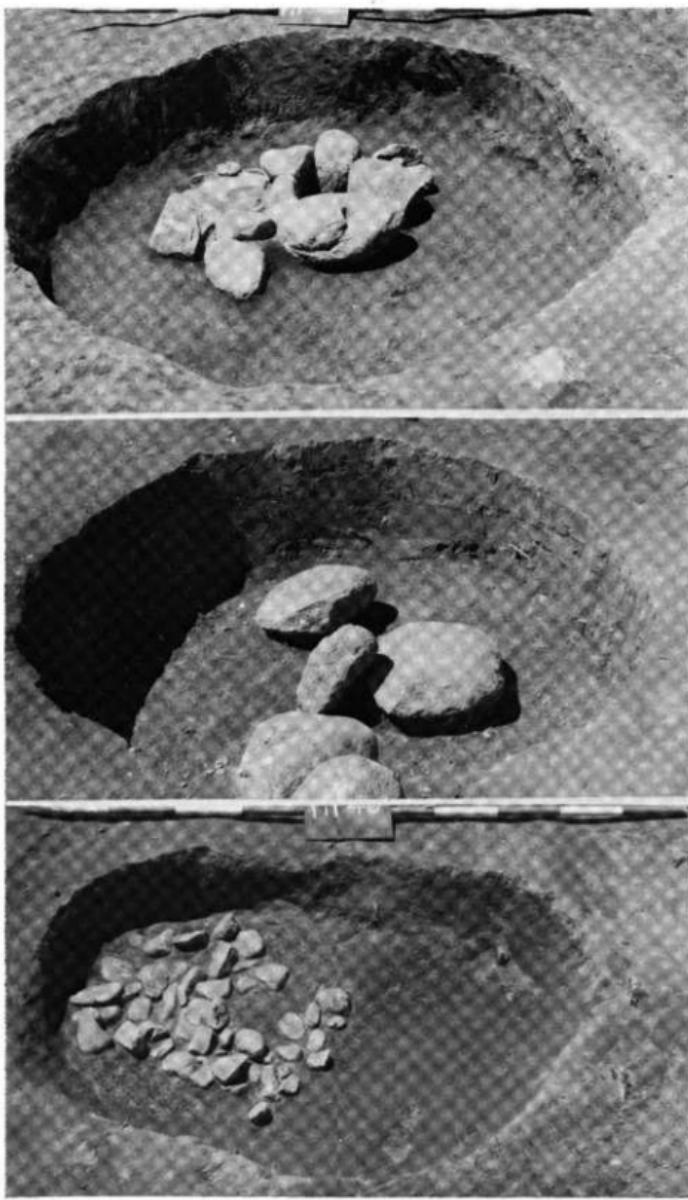
圖版 第二十二 小型穴址 A<sub>1</sub> 形 (上 10 号址·中 29 号址·下 45 号址)



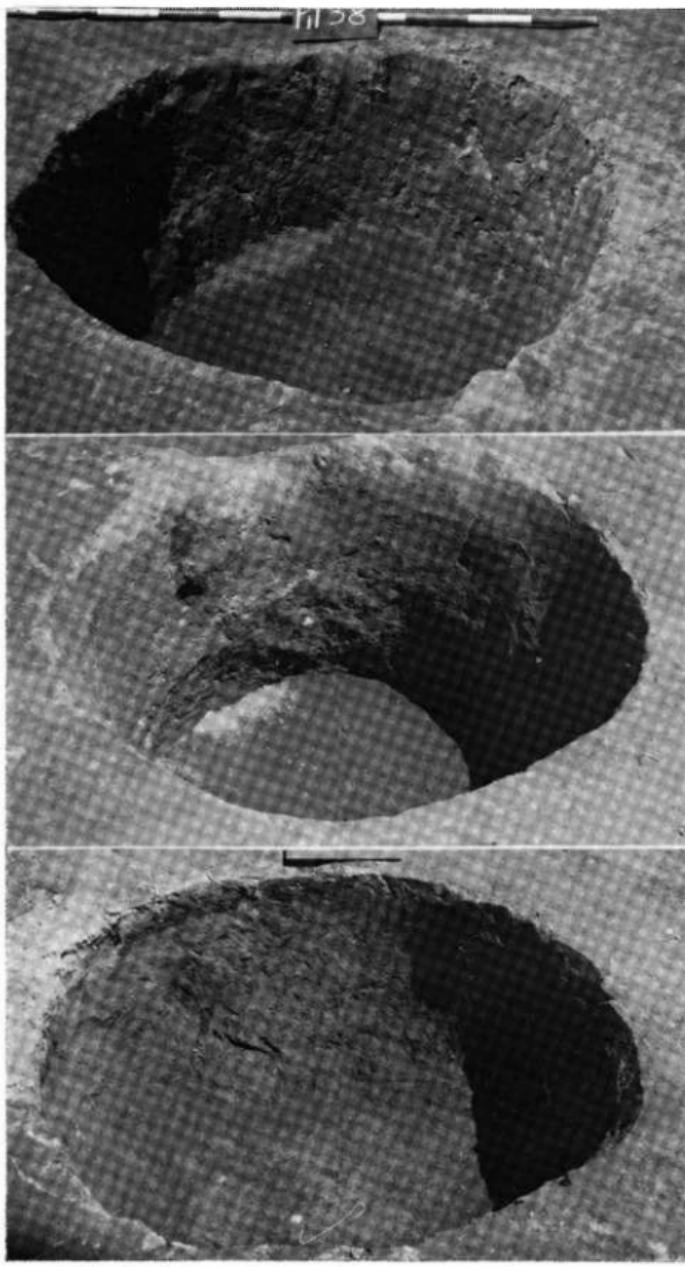
圖版 第二十三 小堅穴址 A<sub>1</sub> 形（上 43 号址，中 39 号址，下 33 号址）



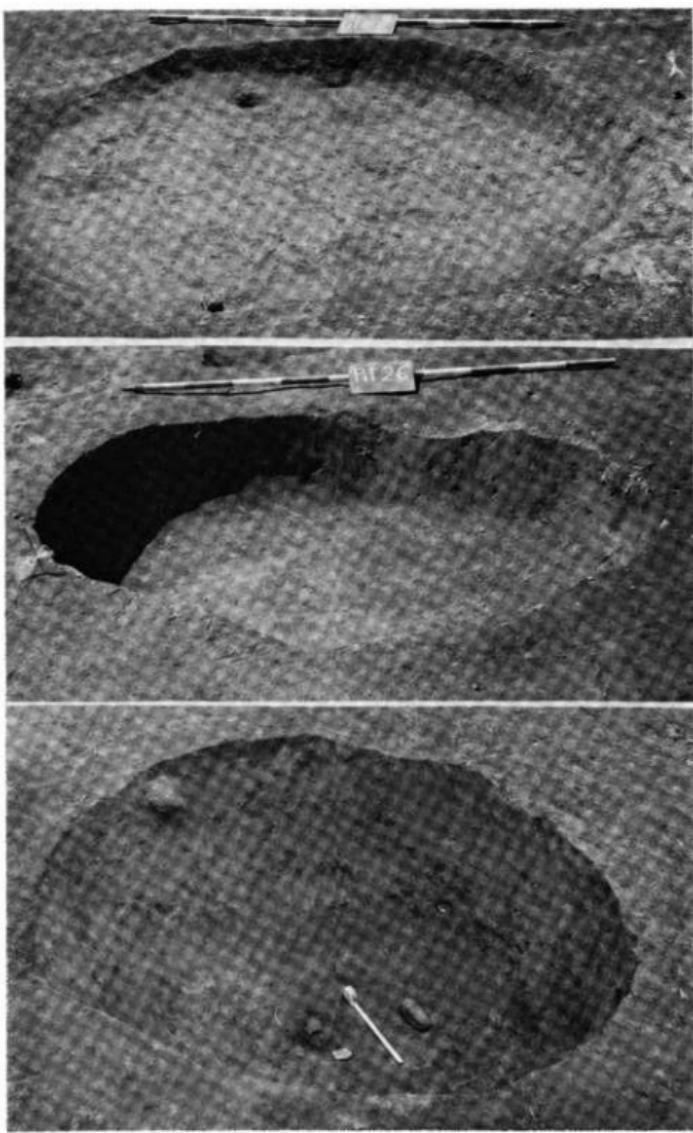
圖版 第二十四 小堅穴址 A<sub>1</sub> 形 (上 41 号址 · 中 5 号址 · 下 42 号址)



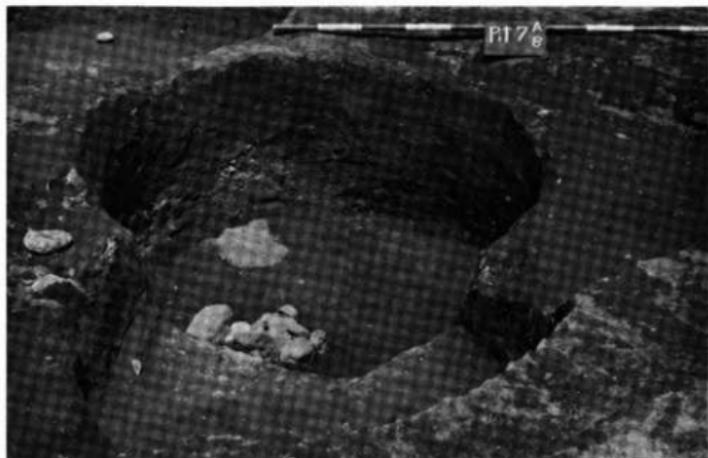
圖版 第二十五 小堅穴址 A<sub>2</sub> 形 (上 22 号址·中 30 号址·下 47 号址)



圖版 第二十六 小堅穴址 A<sub>3</sub> 形 (上 38 号址 · 中 14 号址 · 下 8 号址)



圖版 第二十七 小堅穴址 A<sub>1</sub> 形 (上 18 号址 · 中 28 号址 · 下 45 号址)



圖版 第二十八 小堅穴址 B 型（上 7 號址・中 42, 46 號址・下 勘掘風景）